

和歌山大学教職大学院
教職大学院と連携した
メンター制による
校内研修支援プログラム

【成果報告冊子】

目次

はじめに	3
I 「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム」の概要	5
II 訪問指導の考察	9
初任者との学びの軌跡～学び続け、子どもたちから信頼される教師になるために～／南 知孝	11
(指導記録) 和歌山市立有功東小学校	
メンター制による初任者指導の軌跡～紀の川市の中学校への訪問指導を通して～／鈴木達也	20
(指導記録) 紀の川市立打田中学校／紀の川市立貴志川中学校	
初任者に対する訪問指導／中家 英	48
(指導記録) 岩出市立岩出小学校／岩出市立山崎北小学校	
特別支援学校において実施した初任者に対する訪問指導の記録等／三反田和人	70
(指導記録) 和歌山市立紀北支援学校／和歌山県立和歌山さくら支援学校	
III 校内研修支援	117
『学び、学び合う』学校風土の醸成に向けての支援～大学との連携による校内研修支援の概要と省察～ ／南 知孝	119
メンター制における校内研修支援／鈴木達也	125
校内研修支援／中家 英	131
校内研修支援に係る担当者の省察—特別支援学校におけるメンター制に関して—／三反田和人	138
IV 学びのふりかえり	149
林 真希 (和歌山市立有功東小学校)	
杖村綾乃、橋本正平 (紀の川市立打田中学校)	
楠 千尋、丹下知彦 (紀の川市立貴志川中学校)	
児玉友梨、山本 舞 (岩出市立岩出小学校)	
上西啓生、中林曙美 (岩出市立山崎北小学校)	
貴志諭里、小山裕代、田中千裕、辻 拓真、中村知樹、平畑慎吾 (和歌山県立紀北支援学校)	
奥山昌美、草道正博、立谷果林、平田郁子 (和歌山県立和歌山さくら支援学校)	
V アンケート調査結果より	171
アンケート調査結果の概要／細田能成・岡崎 裕	173
成果と課題／細田能成	181

はじめに

初任者研修制度は1988年に創設され、2003年には拠点校指導教員が配置されるようになった。近年では中教審答申「「これからの学校教育を担う教員の在り方について」(2015年12月)では、①2、3年目への継続を可能にする初任者研修の弾力的運用、②学校としての組織的・継続的育成体制の構築、が提案されている。

本学では、初任者研修について和歌山県教育委員会及び和歌山市教育委員会とともに、平成25・26年度の2カ年にわたり、「初任者研修高度化モデル事業」(以下、「モデル事業」)を行った。モデル事業の目的は、①理論と実践を往還する学びを獲得することにより、生涯学び続けることのできる教員の基礎的資質を養成する、②大学での養成と教育委員会での初任者研修をつなぐ連携・協働の具体化、③初任者研修を核とした校内研修の活性化と校内教員養成システムの開発、であった。

実際には、大学教員が初任者の勤務校を訪問指導し、月に1回大学で「合同カンファレンス」を行った。その成果として、初任者の授業実践力が向上するばかりではなく、学校全体の授業研究や校内研修を活発化させるという波及効果があることも分かった。

こうした成果を引き継ぎ、本学教職大学院では、2016年4月の開設と同時に初任者研修に関わる事業として2つの実験的プログラムを開始した。「教職大学院と連動した初任者研修プログラム」(以下、「初任者研修プログラム」)と「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム」(以下、「メンター制プログラム」)である。

両プログラム計画にあたって、現行の拠点校指導教員による初任者指導について、次の3点を改善ポイントとした。

- ①初任者指導に当たる大学教員に対する初任者指導に焦点化したFDの設定
- ②初任者の育成スタンダードとその共有
- ③相互学習の場となる会議の設定

また、「メンター制プログラム」では、必ずしも授業研究等の校内研修が活発に行われている学校ばかりではない現状に対して、モデル事業を通して認められた校内研修の活性化の効果に着目した。モデル事業の成果を踏まえ、波及効果として認められた校内研修の活性化を目的のひとつに掲げ、初任者の授業実践力向上を図る訪問指導を中核として、若手教員の学びの集団化を図るとともに、その指導を通して今後校内授業研究の中心を担う教員を育成することを目指すこととした。波及ステップを生起させる働きかけをどのように計画的に行うのか、また環境要因によって受ける成果の制限をどのように軽減するのか、を追究すべき課題として取り上げることとした。

本報告書はその1年目の取組をまとめたものである。「初任者研修プログラム」の報告書と合わせて検討していただきたい。

本プログラムの計画実施に協働して取り組んでくださった和歌山県教育委員会及び和歌山市教育委員会、紀の川市教育委員会、岩出市教育委員会、また連携協力校としてご協力いただいた和歌山市立有功東小学校、紀の川市立打田中学校、紀の川市立貴志川中学校、岩出市立山崎北小学校、岩出市立岩出小学校、和歌山県立紀北支援学校、県立和歌山さくら支援学校に感謝申し上げます。
(添田久美子)

I プログラムの概要

「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム」の概要

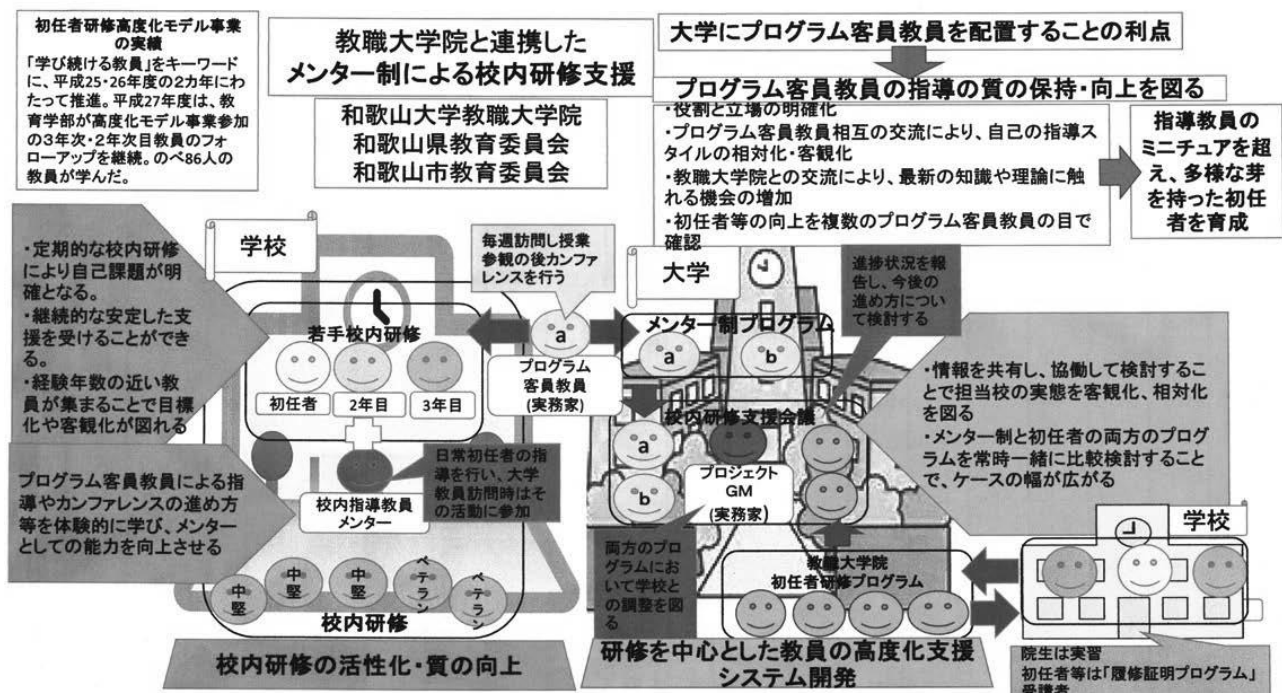
和歌山大学教職大学院

和歌山大学では、文部科学省による「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の一環としての「メンター制による研修実施の調査研究」を受託し、これを「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム」として県下の初等・中等学校の協力を得て平成 28 年度より実施している。このプログラムは、平成 25 年度からフォローアップも含め平成 27 年度にかけ、和歌山県教育委員会、ならびに和歌山市教育委員会との協働によって実施した「初任者研修高度化モデル事業」を土台とするものであり、そこにおける研究成果を踏まえ、また残された課題を克服するべく計画されたものである。

<経緯>

先の「高度化モデル事業」によって得られた知見は、①初等・中等学校における初任者教員に対し、大学教員が勤務校を直接訪問して指導・助言を行うことによって初任者における授業実践力が向上し、自身の学びへの意欲が高まること、②さらに、大学教員の初任者への訪問指導が学校全体の授業研究や校内研修を活発化させること、などであった。そしてそこに残された課題とは、近年における教員の採用動向により、学校内の教員の間での年齢構成におけるアンバランス等が主な誘因となり、校内における授業研究の中心となるべき「中堅教員」が不足し、特に初任者をはじめとした教員経験が5年以下の教員が全教員の半数近くを占めるような学校においては、結果的に、学校内での授業研究の方法や技術が継承されない、という厳しい実態であった。

こうした先行事業の結果を踏まえ、本事業においては先に波及効果として認められた校内研修の活性化を目標のひとつに掲げ、初任者の授業実践力向上を図る訪問指導を中核として、若手教員の学びの集団化を図るとともに、その指導を通して今後の校内授業研究の中心を担う教員を育成することを目指すこととした。



<学校の初任者教員研修における「メンター」について>

「メンター」とは、企業セクターにおいても社員教育や研修の場面において使用される言葉であり「職務上の指導者・助言者」の意味である。さらに「メンター制」とは、そうした新入社員等初任者の精神的サポートを行うための「専任者」を設ける制度のことであって、特に学校においては、身近な指導・助言を行いうる先輩教員のことである。現在の初任者教員の研修システムにおいては、「校内指導教員」、「拠点校指導教員」がそれにあたるが、ここには、初任者の「指導者」としての質の保持・向上をどのように確保するか、あるいはそうした「指導者」として、自己スタイルの固定化・絶対化をどう乗り越えるか、といった課題が残る。そこで、ここに大学からの教員が関わることで、①教員養成を専らとする大学教員によって、初任者研修のシステムとしての質向上が図られ、②校内での指導に当たる教員における、自身の指導スタイルが相対化・客観化され、「メンター」としての指導力向上が図られる。

<プログラムの展開>

基本的に大学からのプログラム教員は週 1 回各協力校に派遣され、初任者教員の授業を参観する。その後（プログラムの核として実施される）「校内研修支援会議（カンファレンス）」では、タブレット端末など最新の教育 ICT 機器を活用しながら、ビジュアルな形で初任者の授業を共有し、校内指導教員、拠点校指導教員、大学からのプログラム教員、そして初任者（時に学校管理職教員や同僚教員など）が参加し、それぞれの立場から意見を述べながら協議を進める。このように、初任者教員による授業を素材として共有し、指導過程をオープンにすることで、それぞれの立場の教員が客観的に校内の研修（授業研究）を体験することになる。この会議の目的は、助言・指導を通じた初任者教員の成長という直接的な効果を得ることであり、これについては参加する教員全員が何らかの形で貢献する。そしていまひとつの（プログラムとしての主眼となる）目的は、そうした初任者指導を客観的に体験することで得られる「メンター」教員の育成である。したがって、本プログラムは基本的に二重構造をもつものといえるであろう。

<平成 28 年度における実施体制>

実施協力校

- ・ 紀の川市立打田中学校
- ・ 紀の川市立貴志川中学校
- ・ 岩出市立山崎北小学校
- ・ 岩出市立岩出小学校
- ・ 和歌山市立有功東小学校
- ・ 和歌山県立紀北支援学校
- ・ 和歌山県立和歌山さくら支援学校

プログラム教員

- ・ 鈴木達也 客員教授
- ・ 三反田和人 客員教授
- ・ 中家 英 客員教授
- ・ 南 知孝 客員教授

II 訪問指導の考察

初任者との学びの足跡 ～学び続け、子どもたちから信頼される教師になるために～

和歌山大学客員教授 南 知孝

1 はじめに

メンター制によって訪問することになった当該校は、児童数286名（13学級）教職員数20名の中規模校で、若手教員の占める割合が高い学校である。

初任者A（女）は講師経験が長く、学級担任を何度も経験しており、学級づくりのノウハウや学習指導・生活指導等についても丁寧に対応ができる教員である。昨年度も当該校に講師として勤務し、1年生を担当している。

最初のカンファレンスで、A教諭にはこれまで培ってきた数々の実践や経験を糧に、新たな気持ちで教師としての第1歩を踏み出してほしいと伝えた。また、子どもたちから好かれ、信頼される先生になってほしいとも付け加えた。

訪問指導では週1回学校を訪問し、授業参観の後カンファレンスを行った。そこでは、授業づくりや学級づくりについてのこと等々、教師としての力量を高めるために様々な観点から助言をした。

ここでは、カンファレンスで伝えた事柄で、A教諭が子どもたちの指導に反映できるようになったと思われる事や今後も引き続き留意していく必要がある事について考察し、以下のように報告する。



授業を振り返ってのカンファレンス

2 訪問指導についての考察

考察1 学び続け、子どもたちから信頼される教師になるために

講師経験が長いとややもすれば安きに流れることも懸念されるので、A教諭には謙虚な気持ちと向上心を持ち続けてほしいと願っている。そこで、初めてのカンファレンスでは、主に次の2つのことを伝えた。

(1) 子どもから信頼される教師であってほしい



子どもの目線に合わせて語りかける

子どもは教師の一挙手一投足をつぶさに観察しており、その影響が知らず知らずのうちに子どもたちの言動に反映されることが多い。子どもと接するに時には、一方的で一面的な見方をすることが絶対にあってはならない。子どもの性格や特徴、行動を常に冷静に且つ的確に把握することに努め、中立・公平に

接することが重要である。所謂「えこひいきをしない」ということである。このことは、教師が子どもから信頼される第1歩であり、教師と子どもとの豊かな人間関係を築いていくための基盤となることを心に留めおいてほしい。

(2) 授業を参観し、良い点や気になった点についてカンファレンスで伝え、これからの授業づくり等の参考にしてほしいと話した。また、人間は慣れや甘えが生じてく

と、つつい「楽(らく)」をしたいと考えるようになる。ここが、教師として伸びるか否かの分岐点である。常に、学び続ける教師であってほしい。

① リズムとテンポのある授業づくりについて(考察2)(考察5)

1年生児童の集中できる時間は極めて短い。ショートスパンでの学習活動を1時間の授業の中に位置づけることで授業を活性化していくことが大切である。

② ノンバーバルコミュニケーションについて(考察3)

教師はコミュニケーション力(話術等)に加えて、表情、態度、動作、目線等も児童を集中させるための大切な要素である。

③ 教室における教師の立ち位置について(考察4)

常に全体を見渡し、児童の様子が俯瞰でき且つ死角を作らないような立ち位置に留意することが大切である。また、タイムリーな机間指導も重要である。

④ 児童名の呼称について

男女に関わらず「さん」づけで呼んでいる。子どもへの敬意を示す教師の気もちが表れており、非常に良い。引き続き実践していくように勧める。

⑤ 指導と支援について

「支援」という名のもとに、指導がおざなりになっている授業が少なくない。「めりはり」をつけた授業構成と児童への対応が大切である。

考察2 リズムとテンポのある授業を心掛けることについて

(1) 4月19日(火)第1回目の国語科の授業を参観してのこと

本時の目標は「相手や場面に応じて、言葉づかいに気を付けながら、あいさつや言葉のやりとりをすることができる」であったが、目標を達成することはできなかった。その原因は、45分間の学習活動のほとんどを、挿絵を見ながら思ったことを発表させることに終始してしまったことにあった。活動にメリハリがなく一本調子になったために、子どもたちの集中力も途切れ中途半端な状態で授業が終了してしまった。

カンファレンスでは、特に1年生のこの時期は集中できる時間は極めて短いので、ショートスパンでの学習活動を1時間の授業の中に位置づけていくことを話した。また、そのことが、子どもたちの学習意欲を喚起することにもつながると伝えた。

リズムとテンポのある授業づくりは、経験年数の長い短いに関わらず、どの教師にとってもなかなか難しいことである。しかし、子どもたちの主体的な学びを生み出すという点で非常に効果が大きいと思われるので、A教諭には、この後も機会を捉えて何回か話をし改善を促した。

(2) 9月27日(火)算数科「おおきさくらべ」の授業を参観してのこと

本時は、鉛筆やリボン等具体物を使って長さ比べをする学習活動を位置づけたので、調べてみたいという子どもたちの探究心を刺激し、活気のある授業になった。ショートスパン(多様な学習活動を仕組む)での学習活動を計画し、1時間の授業を組み立てられるようになってきたことを評価した。



具体物を操作しながら考える

機会あるごとにリズムとテンポのある授業を心掛けるよう助言してきた成果である

と思われる。しかし、一方、前半の学習活動に時間を費やしてしまい、計画した学習内容を指導できず授業が終了してしまったことが非常に残念だった。

カンファレンスでは、1時間の授業の流れについて時間配分を考えながらイメージし計画することが大切であると助言した。

また、経験から「子どもが乗ってこない授業」の特徴的な事柄(①～③)を提示し、授業を計画したり振り返ったりする際の参考にしてほしいとも伝えた。

① だらだらと教師がしゃべりすぎている

復唱や説明の言葉が多くなっていないか。主発問等は予め準備できているか。教えたつもりが分かったつもりになっていないか。

② 教師の言葉や動きにメリハリがない

声に抑揚があるか。話すスピードは適切か。表情や言動に子どもを惹きつけるものがあるか。視線は全体に行き渡っているか。

③ 45分間の中に無駄な時間が多い

45分間の授業プランがイメージできているか。0分スタート、45分終了を常に意識しているか。

(3) 12月6日(火)国語科「日づけとようび」の授業を参観してのこと

本時の授業は、学習活動の内容、方法、手順(スモールステップで)がきちんと考えられた授業であった。調べたり考えたり話し合ったりする等、子どもたちが主体的に学ぶ活動を授業の中にしっかり組み入れ、授業が展開できたことが「よい授業」につながったと思われる。



カンファレンスでのA教諭の第1声は、「今日の授業は、教えてもらったことを意識し

て授業を組み立て、展開することができました。子どもたちも意欲的でした。」であった。自分自身も満足できた授業であったのだろう。この手ごたえと満足感が、次の授業プランを練る際の起爆剤になると考えられる。

「授業、うまく行ってよかったね!」と称賛の声をかけた。今日は、A教諭の成長を実感できた一日となり、私自身も思わず笑みがこぼれた。

考察3 望ましい「指示や説明」の仕方について

(1) 9月13日(火)国語科「かたかなをみつけよう」の授業を参観してのこと

本時の授業は、教科書の挿絵からカタカナで表記する語を見つけること、また、カタカナの語を正しく読んだり書いたりできるようになることをねらいに展開された。導入から10分程度経過したころ、A教諭はワークシートを子どもたちに配付し、4つの指示(①～④)を1度に出してしまった。(※は、分かりやすい指示)

①カタカナと思うところに線を引きましょう。

(※ カタカナで書いたほうがいいと思う言葉の横に線を引きましょう)

②線をひいたところをカタカナに直しましょう。

(※ プリントの下にある四角いマスの中に、カタカナで書きましょう)

③できた人は、となりの人と確かめ合ひましょう。

(※ ややこしい場合は隣の人と相談し答えを見つけあってもいいですよ。)

④ 10分間でストップします。その後、発表してもらいます。

(※ 時計の長い針が15のところになったら終わりです。その後発表します。)

指示を聞いた後、子どもたちはいっせいに作業に取り組み始めたが、しばらくすると「先生、いくつ線を引くの?」「線を引きました。先生、次、何するの?」「カタカナをどこに書けばいいの?」等の声があちらこちらからあがった。指示した事柄が多かったことと丁寧な説明に欠けたために、子どもたちの学習活動が停滞してしまったのである。また、A教諭もその対応に苦慮するという場面があった。

参観後のカンファレンスで、子どもたちに「指示や説明」をする場合の大切なポイントについて話をした。

まず、子どもたちが分かる授業にするためには、子どもたちに分かりやすい丁寧な指示や説明をすることが大前提であると伝えた。また、子どもは同時に2つのことはできないと考えたほうが良いとも伝えた。いったん、動き出してしまうと指示を出しても通らないことが多い。これらのことを踏まえて、次の



丁寧な説明は、主体的な活動を促す原動力

4つのことに留意するよう具体例を交えながら話をした。

- ① 全員の目が集中してから指示や説明をすること（授業の基盤は学習規律から）
- ② 1回で短く話すこと（1度にたくさんの指示を出さない）
- ③ やむをえず複数のことを1回で指示したいときは、ナンバリングを使うこと
- ④ 板書で示す等、視覚に訴える工夫をすること

子どもたちに「指示や説明をする」場面は何も授業の中だけに限ったことではない。学校生活の様々な場面でそのような機会が数多くある。常に意識して子どもたちの指導にあたってほしいと結んだ。

このことについては、この後の授業参観時でも何度か気になる時があったので、カンファレンスではその都度繰り返し伝えた。

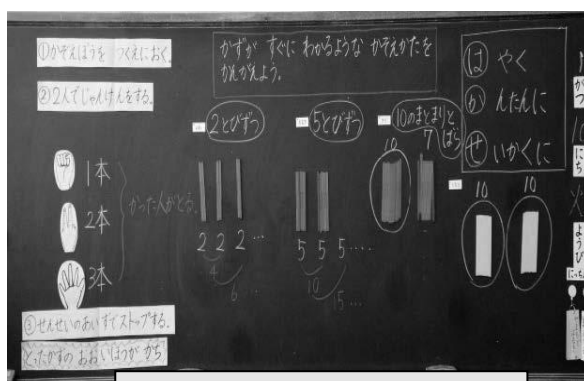
(2) 1月10日（火）算数科「大きいかず」の授業を参観してのこと

本時の授業は、50から100までの数を工夫して数えることが目標であった。

A教諭は、かぞえ棒を取り合うゲームを学習活動に取り入れ、目標にせまろうと計画していた。そのゲームをするにあたっての手順やルール・約束ごとを書いたカードを黒板に貼り丁寧に説明していった。カードには、次のように書かれていた。

- ① かぞえ棒を机に置く
- ② 2人でじゃんけんをする
グーで勝てば1本
チョキで勝てば2本
パーで勝てば3本
- ③ 先生の合図でストップする
とった数の多いほうが勝ち

右の写真がそれである。カンファレンスでは、そのことを大いに評価し褒めた。



指示や説明の順序は視覚に訴える

これまで、複数のことについて指示や説明をするときには、ナンバリングをすること、また黒板に書いたりカードを貼ったりし子どもたちの視覚に訴えることが大切であると伝えてきた。今日の授業では、そのことが見事に実践されていた。そのため、子どもたちの学習活動は混乱することなくスムーズに展開することができた。これからも、今日実践できたことを忘れず授業づくりを行ってほしいと伝えた。

考察4 児童を評価し、指導する机間指導の在り方について

5月17日(火)算数科「いくつといくつ」の授業を参観した。「7このどらやきを2人で分けると、いくつといくつに分けられるか」を数図ブロックを使って考える授業であった。まず、子どもたちに課題を与え個人思考させた。その間、A教諭は机間巡視をしながらその様子を見て回っていた。しかし、子どもたちの躓きや考え方の傾向の把握が十分でなく、その結果一部のよく発表する子たちの考えによって授業が進められ、目標を達成するには至らなかった。

カンファレンスでは、何のために机間指導をするのか、そのねらいや方法について話をした。まず、「子どもたちは、教師の励ましの言葉やアドバイスを心待ちにしていること」「授業の中で子ども一人ひとりの個に応じた指導が最も効果的に行えること」「子ども一人ひとりの学習状況を把握し、躓きを発見したり全体で交流させたい考えを把握したりできること」さらに、「躓いている子に個別の指導が行えること」を伝えた。

机間指導が、子どもたちの学びにとって有益かつ効果的なものになるために、次の3つの点に留意し実践に移していくよう促した。

(1) 1時間の学習活動の中で、できれば3回行いたい

机間指導は、時には臨機応変に対応しなければならない場合もあるが、原則として3回程度行いたい。1回目は、学級全体の考えの傾向性を把握する。2回目は、子どもたちの理解の状況を確認、把握する。3回目は、誤りや躓きに対し個別の指導、支援をする。



タイムリーな支援で学習活動に拍車がかかる

限られた時間の中で机間指導を有効にしていくためには、目標に迫るための学習活動を仕組むこと、さらに活動の仕方を明確に理解させておくことが前提となる。なお、その際の「指示や説明の仕方」については、考察3に記述したとおりである。

(2) 座席表を活用すること

誰がどんな考え方をしているのか、課題が解決できたのかどうか等を把握するためには、座席表を準備しメモをしておくことが有効である。前時までの学習状況の記録をもとに、個に応じた手立てを準備しておくことも効果的である。

(3) タイムリーな支援となるような言葉かけ等を心掛けること

経験上、どの学年の子どもたちであっても先生には、「机の間を回って、ヒントを出してもらったり必要な説明をしてもらったりすること」を期待している割合が高いと思われる。特に、やる気に欠ける子や理解に時間を要する子にとっては、よりその期待度は高い。教師は子どもたち一人ひとりの学びの状況や実態に応じ

て、「いいぞ、いいぞ。もう少し!」「よくがんばったね。すごい!」等、励ましや称賛の言葉をタイムリーにかけてあげたい。「うんうん」と子どもの目を見て頷くことも子どもたちにとっては心強い支援となることも付け加えておいた。

机間指導については、この時のカンファレンスで伝えて以降、A教諭にはしっかり意識して実践に移していこうという姿勢が見られるようになってきた。

しかし、ただ、教科やその内容によって十分でないことも時々見受けられたので、引き続き課題として取り組んでいってほしいと伝えている。

考察5 45分間の授業をデザインすることについて

11月15日(火)算数科「ひき算2」の授業を参観した。本時は、展開部分でのブロックを操作しながら答えを求める活動に約20分程度も費やしてしまい、まとめや振り返りができずに授業が終了してしまっただけで、これまでも授業が延長されることや中途半端で終わってしまうことは、気になっていた点である。

そこで、カンファレンスでは次のことを伝えた。

経験年数の多少に関わらず教師であれば誰しも、「導入に時間をかけすぎてしまった」「子どもの考えを焦点化できなかった」「発問が適切でなかったため、授業が混乱してしまった」等々の理由により、目標が達成できず、授業が中途半端(尻切れトンボ)で終わってしまったことを数多く経験している。45分間できちんと授業を終わらせることは、どの教師にとっても目標であり願いでもあるが、同時に非常に難しい課題でもある。A教諭についても例外ではない。



板書計画から、授業をデザインする

そこで、できるだけそうならないための処方箋の一つとして、次の3点を日々の実践の中で試みることを促した。

(1) 板書のレイアウトから45分間の授業を計画すること

予め、板書を計画することで、学習の流れがイメージできたり考えさせることと教えるべき内容が整理できたりして、授業がブレにくくなる。

教師は忙しい。一日1時間の授業だけでも良い。是非、実践してほしい。

(2) 授業は「見る」&「見てもらう」ことで、授業センスが磨かれる

授業が上手になりたいなら、また授業力をつけたいならば、授業がうまいと言われる先輩や後輩等々の授業を数多く見ることである。そして、追試し、誰かに見てもらうことである。授業は、良いイメージを持つことが上達の第1歩。うまい授業を見ることで、センスも養われる。遠慮はご法



参観してもらうことで、授業力が伸びる

度。時間が許す限り、積極的にお願いし、参観させてもらうことが大切である。

しかし、特に小学校低学年の学級担任は、児童に自習をさせ他学級の授業を参観することには大きな抵抗があると思われる。学校長をはじめ多くの教員の理解と協力を得ることが必要である。

A教諭には授業力向上に向け、引き続き課題意識をもって研鑽に励んでほしいと伝えている。

(3) 「授業の山場はどこか」を意識して、授業を計画すること

授業の山場にウエートを置いた展開（時間配分）を考える。そうすることで、指導の道筋が明確になってくる。同時に、授業に「リズムとテンポ」が生まれるという効果も期待できる。

3 おわりに

1年間A教諭の授業参観及びカンファレンスを行ってきた。上記で報告したように授業づくりや子どもへの対応等々、プロの教師としての授業技術や指導方法について大きく変容を遂げつつある。

「若い時に流さなかった汗は、年を取った時の涙となる」という言葉がある。A教諭には、向上への歩みを止めることなく学び続ける教師であってほしいと思っている。また、この1年間の学びの経験やその蓄積が、今後の教師人生にとっての航路を照らす羅針盤となってくれることを切に願っている。

授業改善に向け、活発な意見交流がなされた
カンファレンス



メンター制度によって、延べ30回あまり、学校を訪問させていただく機会を得ることができた。また、同時に、多くの教員や子どもたちとの関わりをとおして、貴重な経験をすることもできた。この学校訪問をとおして、大学と小学校との関係が「近くて遠い」関係であったものから、「近くて近い」関係に少しずつ変わってきていることを実感している。

最後に、学校長のメンター制度についての深いご理解とご協力、そして幾多のご配慮に厚く感謝申し上げます、終わりとしたい。

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導の観点	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
4月	19	A	1	国語	「なんていおうかな」（教室編）	<ul style="list-style-type: none"> ・教師として成長し続けるために、大切にしてほしいこと（考察1） ・リズムとテンポのある授業づくりについて等々 	■4/6 学校訪問をし、細田GMが趣旨説明
	26	A	1	算数	「かずとすうじ」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（算数）について ・学級づくりについて ・教師の立ち位置について 等 	■4年道徳参観及びカンファレンス
5月	10	A	1	生活	「れっつごー！がっこうたんけん」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（生活）について ・生活科の授業づくりの課題及び指導のポイントについて 	
	17	A	1	算数	「いくつといくつ」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（算数）について ・児童を評価し、指導する机間指導の在り方について（考察4） 	■4年算数・2年道徳参観及びカンファレンス
	24	A	1	道徳	「なにをしているのかな」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（道徳）について ・道徳の時間の指導について ・特別な支援を必要とする児童への指導と支援について 	■5年算数参観及びカンファレンス
	31	A	1	国語	「はなのみち」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（国語）について ・学習指導案を作成する時の留意点について ・特別な支援を必要とする児童への指導と支援について 	■学校長との懇談
6月	7	A	1	生活	「れっつごー！がっこうたんけん」	<ul style="list-style-type: none"> ・45分間の学習活動の構成の仕方について ・特別な支援を必要とする児童への指導と支援について（保護者への情報提供及び協力・連携の在り方） 	■4年社会参観及びカンファレンス
	14	A	1	国語	「あいうえおであそぼう」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（国語）について ・授業力を高める学習指導の在り方について（授業の山場づくり 指導技術） 	■6年国語・5年道徳参観及びカンファレンス

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導の観点	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
6月	21	A	1	算数	「ひきざん」（のこりはいくつ）	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（算数）の授業について ・ひき算の学習指導のポイントについて ・研究授業（生活科）学習指導案への指導と助言について 	■学校長との懇談
	28	A	1	生活	「とびだせ！いちびかたんけんたい」	(市) 学校訪問でAが研究授業を行う。カンファレンスは次回訪問で実施する。	
7月	5	A	1	生活	「とびだせ！いちびかたんけんたい」	・研究授業についての指導と助言について	■2年国語参観及びカンファレンス
	12	A	1	国語	「ほんは、ともだち」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（国語）の授業について ・国語科における「読書紹介活動」について 	
8月	4	A		総合的な学習の時間	<ul style="list-style-type: none"> □夏季校内研修に出席する。 講師 京都市立紫野小学校長 辻本博子氏（総合的な学習の時間の授業づくり） 	■講師紹介及びアポイントメントをとる。	
9月	13	A	1	国語	「かたかなをみつけよう」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（国語）の授業について ・望ましい「指示や説明」の仕方について（考察3） 	■4年社会・6年算数参観及びカンファレンス
	27	A	1	算数	「おおきくらべ」（ながさくらべ）	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（算数）の授業について ・リズムとテンポのある授業づくりについて（考察2） 	■4年道徳参観及びカンファレンス
10月	11	A	1	生活	「ひみつのあそびワールドだいさくせん」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（生活）の授業について ・授業改善に向けての振り返りの視点について（考察4） 	■2年算数参観及びカンファレンス

月 日	主な授業参観等の概要					カンファレンス等における指導の観点	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など			
10月	18	A	1	国語	「まちがいをなおそう」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（国語）の授業について ・スモールステップでの授業展開について ・ユニバーサルデザインの視点に立った教室掲示について 	■2年算数参観及びカンファレンス
	25	A	1	算数	「たしざんのおてがみ」	<ul style="list-style-type: none"> ・午後、学習参観及び学級懇談会のため、カンファレンスは次回訪問時に行う。 	全学級を授業参観する。(テーマは人権)
11月	1	A	1	算数	「かたちづくり」	<ul style="list-style-type: none"> 校内研修に出席し、研究授業についての指導助言を行うとともに「総合的な学習の時間の授業づくりのポイント」について講話をする。 	5年研究授業参観(総合的な学習)
	8	A	1	国語	「じどうしゃくらべ」	<ul style="list-style-type: none"> ・国語科における「単元を貫く言語活動」を位置付けた授業計画及び授業づくりについて ・特別な支援を必要とする児童への指導と支援について 	
	15	A	1	算数	「ひきざん 2」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（算数）の授業について ・45分間の授業をデザインすることについて(考察5) 	■6年家庭科授業参観及びカンファレンス
	29	A	1	国語	「むかしばなしがいっぱい」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（国語）の授業について ・本好きな子どもに育てるために 	
12月	6	A	1	国語	「日づけとようび」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（国語）の授業について ・リズムとテンポのある授業づくりについて ・授業センスを磨くということについて 	■2年算数参観及びカンファレンス
	13	A	1	生活	「一ぴか☆スーパーランドをオープンしよう」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時（生活）の授業について ・発表のさせ方についてについて(何も見ない、何かを見せる) 	

月 日	主な授業参観等の概要					カンファレンス等における指導の観点	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など			
1月	10	A	1	算数	「大きいかず」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（算数）について ・望ましい「指示や説明」の仕方について ・次回に実施する授業（算数）の教材研究 	
	17	A	1	算数	「大きいかず」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（算数）について ・子どもの問題意識を醸成する課題提示の工夫について ・45分間の授業計画を立てる際のポイントについて 	■若手教員が多数カンファレンスに参加
	24	A	1	算数	「大きいかず」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（算数）について ・子どもの学習意欲を引き出す指導方法について ・道徳の指導のポイントについて 	■4年道徳参観及びカンファレンス ■細田GM出席
	31	A	1	算数	「かえますか？かえませんか？」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（算数）について ・次回に実施する授業（道徳）の教材研究 	
2月	7				学校行事のため、訪問なし		
	14	A	1	道徳	「およげない りすさん」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（道徳）について ・教材研究することの価値について 	
	21	A	1	道徳	「ハムスターの赤ちゃん」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業（道徳）について ・1年間の振り返りと今後に向けて 	

メンター制による初任者指導の軌跡 ～紀の川市の中学校への訪問指導を通して～

和歌山大学客員教授 鈴木 達也

1 はじめに

筆者はこれまで様々な立場から初任者研修に携わり、その実態を見てきた。

最初は法定化されてすぐの平成6年、初任者研修を直接運営する和歌山県教育研修センター（当時）の指導主事として。制度としての初任者研修が始まったばかりで、学校現場などからの風当たりはなかなか強かった。教員組合からも「研修が過重にならないように」との申し入れを受けての船出だった。基本的に月に一度の校外研修を担当・運営し、一年に一度は宿泊研修として初任者とまさに寝食を共にして、時には彼らの悩みを聞き、アドヴァイスを行ってきた。また、膨大な初任者研修の計画書や報告書にも接してきた。ただしその行間からは初任者個々の具体的な変容や成長を読み取ることはできなかった。

初任者の変容や成長について実体のあるものとして感じられるようになったのは学校現場の校長になってからである。ある初任者は着任時の挨拶さえ満足にできなかった。ぼそぼそと呟くような声で何を言っているかわからない初任者を一喝したこともあった。「そんな話し方で子どもたちに伝わると思うのか！」と。

そういう初任者の授業を見る。言いたいことは山ほどある。ただ余程のことがない限りでできるだけ控えた。その役割を果たすのは拠点校指導教員であり、校内指導教員であったから。

初任者は成長する。何十倍か十何倍かの難関を潜り抜けて教員として採用された若者たち（中には壮年と言っていいほどの年齢の者もいたが）なのである。「頑張ろう、やってみよう」という意欲に燃えて教職に就く。成長するのは当然である。そこに制度としての初任者研修があるから、校外研修などで常に自覚が涵養される。だから授業もうまくなる。不適切な言い方かもしれないが、「放っておいても成長する」のである。ところが一定期間を経ると誰しもが壁にぶち当たる。それはひと月後かもしれないし、夏休み明けかもしれない。また二年目以降かもしれない。

この壁に当たった時以降の対応が肝心である。このことに校外研修での教育委員会の指導主事は無力である。なにしろ彼らは日々学校現場において苦悩しているのであり、月に一度の校外研修でそれに対応するマニュアルなど提示できるはずもないのだから。

そこで重要なのは「学校」である。より詳しく言えば、初任者を取り巻く同僚の教員の眼差しであり、アドヴァイスであり、共に生じた課題に立ち向かう集団としての意識である。勿論、管理職の指導助言も必要であるが、初任者が頼るのは先輩の教員たちである。佐藤学氏はこれを「同僚性」と表現しているが、学校現場における「同僚性」の構築こそが壁に当たった教員のその後の成長を担保するものだと確信する。初任者だけではなく教員は皆、「学校」という多くの教員により構成される場で成長するのである。それは校外研修とは比較できないほどに重要な場なのである。

本プログラムは「教職大学院と連携したメンター制による校内研修支援プログラム（以下「メンター制」と略する）」と言われる。その方法・目的は既に述べられているが、ここで

改めて書くと、「大学の客員教授が校内指導員とともに初任者・若手教員の授業参観及び校内カンファレンスを行うプログラムを実施することにより、初任者・若手教員の実践力の向上を図るとともに、校内指導員等のメンターとしての力量を向上させ、校内研修の活性化や質の向上を目指す」ものである。まさに「同僚性の構築」と軌を一にしている。

このことを念頭に置き、筆者は紀の川市の二つの中学校を訪問することにした。週に一度の訪問でどれだけのことができるかどうかはわからないが、初任者のみではなくできるだけ多くの当該校の教員と触れ合おうと考えながら。

2 メンター制における初任者指導

(1) K中学校における初任者指導

①概要

筆者がメンター制で訪問することになった中学校2校は紀の川市に位置する。紀の川市は先の町村合併により4つの町が一つにまとったもので、紀ノ川によって南北二つに分けられる。ここで述べるK中学校はその南全域を校区とする各学年5～6学級の中規模校である。

平成28年度、K中学校に配属された初任者は二人。一人はT教諭で男性、担当教科は数学科である。彼は2年生の副担任であり、ソフトボール部の顧問である。いま一人はK教諭で、女性の国語科担当である。彼女は3年生の副担任であり、バスケットボール部の引率顧問となっていた。二人はどちらも講師として1年間、中学校に勤務しており、同じ那賀管内の中学校で経験を積んでいる。

このK中学校と後に述べるU中学校それぞれの初任者を担当する拠点校指導教員はヴェテランのY教諭（担当は理科）で、K中学校に在籍している。また、K中学校の校内指導教員はU教諭（担当は国語科）で、採用3年目でまさにメンター制の中核として関わっていきたい存在である。

学校訪問に先立ってS校長と打ち合わせを行っている。S校長は先の和歌山大学における「初任者の高度化モデル事業」実施時にも他の中学校で校長として関わってくれている。その際、極力初任者の授業を参観し、授業カンファレンスにも同席してくれた校長だと聞いていたので、メンター制の事業の趣旨も理解していただいております、積極的な協力も期待できたとし、また実際いろいろところで便宜も図っていただいた。

さて、既にも書いたように、初任者研修を実のあるものとするか否かについて大きな要素となるのは、その初任者が属する学校の教員集団である。そういう意味でK中学校は格好の学校であった。「同僚性」が構築され、初任者はその雰囲気の中で見守られる環境ができあがっていたのだから。

K中学校は十数年前から「学校の荒れ」を経験していた。生徒の問題行動、不登校等が多く、教員集団はその荒れに対処することに追われていたという。そこで取り組んだのが「協同学習」である。子どもたちの「ワクワクドキドキ感」を大切に、それを授業の中に取り込むことによって、授業改善を目指した。「授業こそが積極的な生徒指導」と位置付け、すべての教員が授業改善に取り組んだ。

グループ別に机をくっつけ、子どもたちで話し合わせ、課題解決に向けて取り組む。教員たちはそのために授業構成を見直し、これまで展開したこともなかったような授業を行う

ために切磋琢磨した。その結果、次第に荒れは少なくなっていったという。

この授業改善に向けての取組は現在も続いている。和歌山大学教育学部との連携による授業研究も年に2回行われている。その時は大学から3～4名の教員がK中学校に赴き、公開授業と研究授業を参観する。公開授業はすべての教員が行い、研究授業は学年で一つずつ行うことになっている。その後、協議会も学年別で実施され、さらにすべての教員が参加しての全体協議会が行われる。ちなみに筆者もこの席で発言させてもらったことがある。学校の自主的な授業研究は和歌山県では珍しく、この取組が根付いていること、そして今後さらに発展するよう願っていると話した。

実はこの研究授業の際、メンター制を具現化するような場面に立ち会っている。

3年生の研究授業は理科のT教諭によって行われ、同じ3年生に所属する初任者のK教諭も参観していた。

「物体の運動」に関する単元で、T教諭は様々な運動の具体的な調査をグループ毎に割り振った。グループの中で台車の運動を、それぞれ緩斜面、急斜面、落下などというケースに分けて一人一人が調べる。その時はグループから分かれてのいわゆるモザイク式による実験を行う。同じ実験グループで結果や課題をまとめ、まとまったところで元のグループに戻り、報告を行う。そして最終的にそのグループで異なるケースでの実験結果をまとめるのである。T教諭は実験途中の目の配り方、助言の仕方、元のグループに戻ってからの協議の促し方等、すべてにおいて優れた対応を見せていた。

その授業の途中、筆者は「すごい……」というK教諭の呟きを聞いている。確かに思わずそう呟くような授業であった。それをK教諭はまざまざと見せられた。教科は異なるものの授業の本質を射抜いたような優れた展開に感性を揺さぶられたのではないだろうか。初任者にとってなにより糧となるのは優れた授業を見ることである。勿論、それを素晴らしいと看取り、それを自らの栄養とする力が初任者に備わっていることが前提だが、このT教諭のような授業はなかなか見られるものではない。

K中学校はこういう場面に初任者に用意できる学校である。

和歌山大学教育学部との連携以外に紀の川市の研究指定も受けており、教員は研究授業を行う機会に恵まれている。往々にして教員は研究授業を忌避しがちであるが、授業を公開することは必ず授業力を向上させる。その機会が多いことに越したことはない。そういう環境に置かれていることをK中学校の初任者は感謝しなければならない。

初任者は初めて授業を構想する時、或いは実際に展開する時、何を基準として、または何を参考にするのだろうか。

学習指導要領は学習する内容の最低基準を示しているが(次期改定では学習方法まで踏み込んで記述するようであるが)、それはあくまでも当該学年の当該教科でどのような内容を扱うかを規定しているだけであって、実際の授業を構成するにはあまり参考にはならない。

筆者が担当する4人の初任者にそのことを訊いてみた。「あなたは何を参考にして授業をつくれますか?」と。

ちなみにこの初任者たちは4人とも教育学部の卒業生ではない。だから大学で模擬授業や実習演習のような経験をあまり積んでいない。

返ってきた答はほぼ同じで、「中学校時代の先生の授業を参考に」ということであった。既に書いたように彼らは1年の講師経験を持つ。その講師の時代における授業はまさに

自らが受けていた授業を思い返しながらの授業であったわけである。

これは何も特別なことではない。初めて教壇に立った者はすべからくそうであろう。筆者もまた同じであったことを思い出す。授業経験は教育実習の2週間だけ、授業コマ数にして僅か10時間ほどではなかったか。それだけの体験しかなく、新規採用として中学校に赴任し、訳のわからないままに学年所属が決まり、担当する学級を割り振られ、教諭として初めて授業を行った時、それはかつての恩師の授業スタイルを真似たものだった。

「まなぶ」は「まねぶ」に由来する。「真似」をすることが「学ぶ」ことに通じるのである。だから多くの初任者は中学校や高校時代の先生の授業を真似することから教員生活を始めるということになる。

現在は制度としての「初任者研修」があるから、或る意味、今の初任者は恵まれていると言える。校外研修で教員としての心構えや服務規律を教えられ、校内研修では校長・教頭はもとより拠点校指導教員や校内指導員の手厚い助言が与えられる。さらに今回、筆者のような存在もつくことになった。「船頭多くして船、山に登る」との諺がある。そんなことにならないよう気を配りながら指導をしていかなければならないと、自戒の念を込めた。

② T教諭への指導

T教諭は数学科担当で、2年生副担任である。中学校では往々にして持ち時間数を云々することが多いのだが、彼は1年生と2年生共に2学級の生徒を教えていて、ティーム・ティーチングも含めて週の担当時間数は全部で14時間である。これは教科時間以外の「道徳」や「総合的な学習の時間」を含めたとしてもかなり余裕のある時間数である。その分、教材研究など授業の準備に時間を割くことができる。初任者として恵まれていると言えるだろう。

では、実際の授業とその後のカンファレンスをどのように行ったのか具体的に述べたい。

まず、次の授業指導略案を見てほしい。ちなみに、初任者が毎週行う参観授業では一定様式に則った学習指導案を求めてはいない。それを求めることは初任者の負担になるからだ。そのため指導略案だけの提出に留めている。またその略案は個々の様式に任せている。

T教諭は1、2年生の学年の授業を担当しているが、筆者がK中学校を訪問する月曜日は主として2年生の授業が組まれているため、専ら2年生の授業を参観することが多かった。

ここで示すのは、筆者のK中学校への二度目の訪問の際、2年生でT教諭が行った授業の指導略案である。

数学科学習指導案（略案）

平成 28 年 4 月 25 日（月）第 1 校時
2 年〇組 男子 18 人、女子 14 人

単元名 「式の計算」

本時の目標 ①「数×多項式」、「多項式÷数」の計算をできるようにする。
②整数×（ ）±整数×（ ）の計算をできるようにする。

本時の流れ	教師の働きと生徒の反応	指導上の留意点
前回の復習 18 分	10 分程度で小テストを行い、5 分程度で隣の人と答え合わせをする。その後、回収。筆算の仕方を前で確認する。（2 分）	○前回の内容が定着しているか、確認する。
「数×多項式」、「多項式÷数」の計算を学習する。	①ふりかえり 1 年を簡単に解かせる。 ②例 1、例 2 を使って「数×多項式」、「多項式÷数」の計算方法を指導する。	○（ ）の中が文字になっても同様に分配法則で計算できることを指導する。
整数×（ ） ±整数×（ ） の計算を学習する。	③問 1 を解かせ、前に持って来させる。 ④例 3、例 4 を使って、整数×（ ）±整数×（ ）の計算をできるようにする。 ⑤問 2 を解いてもらい、残った人は宿題とする。	○できた人にペンを持ってもらい、丸つけとわかっていない人に指導してもらおう。 ○（ ）が二つになっても同様に分配法則で計算し、同類項をまとめて計算できることを理解させる。

この単元は 1 学年の復習を扱っていて、これから 2 年生の新しい単元に入る前に、1 年生で学習した内容をきちんと理解しておいてほしいという T 教諭の願いがこもっている。それ故いわゆる「指導書」に依拠しておらず、T 教諭自身が教材に向き合い、自らの考えで単元構成を行い、指導略案を作成し、それに則って授業を展開している。この授業に関しては拠点校指導教員の Y 教諭も筆者もまったく関与していない。そういう意味で、まったく誰からも指導を受けていない白紙の状態での T 教諭の授業であったと言えるだろう。

この授業を参観して筆者が最も感じた印象は「生徒はできるだけ多くの問題を解くことによって理解力を深めるのではないか」という T 教諭の強い思いであった。

この授業の流れを概観してみよう。

前時にも同じ内容の授業をしているので、そこで学習した内容の問題をプリントにして生徒に配付した。それを10分間という時間制限を設けて小テストとして実施する(Ⅰ)。そしてそのプリントを隣の席の生徒同士が交換し、答え合わせをさせる。この時、教員は答えを言うだけで具体的な解説は行っていない。



T教諭の授業—グループ学習に取り組む—

次に類似問題を前のホワイトボード(K中学校では黒板ではなく、全教室ホワイトボードが設置されている)に書き、「数

×多項式」「多項式÷数」の計算を個別に考えさせ、その答えが出た生徒に挙手させて指名、答を発表させる(Ⅱ)。その後、授業者が模範解答を示す。

さらに練習問題を解くように指示し、できた生徒から授業者のところに持って行き、採点を受ける(Ⅲ)。時間の経過と共に持ってくる生徒が多くなってからは既に正答した生徒にも「〇〇君の答え合わせをしてあげて」と採点を頼んでいる。

ここまでで目標①について終わり、続いて目標②に入るために課題を板書してそれを生徒に解かせようとした(Ⅳ)が、そこで授業時間終了のチャイムが鳴ったため授業を終わらせるを得なかった。

こうした授業を受けて、その後授業カンファレンスを行う。授業カンファレンスは数学科独自にやるのではなく、K中学校の場合、国語科のK教諭の授業も含めて実施する。時間はほぼ1単位授業時間、すなわち50分を目途としている。参加者は初任者2人に筆者、拠点校指導教員のY教諭、校内指導教員のU教諭の5人で、時に校長や教頭、さらには和歌山大学の細田客員教授が入ることもあった。だから協議する内容は自ずと多岐に亘る。それぞれの教科に関すること、生徒指導の面、学級活動について言及する場合もあれば、部活動へとの話が内容が飛躍することもある。また、U教諭は授業の関係で1日に初任者2人の授業を見ることは不可能で、どちらか1名の授業参観となる。U教諭の専門教科は国語科であるので、どうしてもK教諭に対する指導助言が多くなるのは致し方ない面があるのだが、数学科についても思うところがあればどんどん意見を出してもらおうようお願いした。ひいてはそれがメンター制の目標とも合致すると考えたからである。

さて、話をT教諭の最初の授業カンファレンスに戻そう。

上の授業の概観からわかるように、生徒に解かせる問題(例題や練習問題)が多い。筆者は端的に「多過ぎる」と指摘した。(Ⅰ)は10分間で5問、(Ⅱ)は2問、(Ⅲ)では3問である。ここまでで10問に挑戦させている。そしてこの後、実際には扱うことはできなかったが(Ⅳ)で2問用意されていた。これは生徒にとってかなりの負担になっている。

果たして問題を多く解かせることが理解につながるのだろうか。確かにある程度理解できた生徒には効果的かもしれないが、1年生の段階でつまづいている生徒には十分な説明がなく、ただ単に問題を重ねるだけでは逆効果になっていないだろうかと指摘した。

このことと関連して、教員は課題に取り組ませている間、机間巡視をしていたが、例えば

小学校段階で理解しておかなければならない「通分」でつまづいている生徒に気が付いていなかった。「通分」がわかっていない生徒に中学校段階での内容を理解させるのは極めて難しい。

生徒に取り組みさせる問題をある程度精選し、一つの問題についてじっくりと時間を掛けて学習させる。そして「わかった」という段階で次の課題に移る。こういう段階を踏まえて日々の授業をつくるべきではないかと、根幹に関わる点を指摘した。ただこのことはどの教員でも悩むことであり、「言うは易し、行うは難し」であって、ヴェテランの教員でもなかなかできていないのが現状である。ただ指摘しておくことによって常に課題として意識しておけば、今後の授業構成に益することが多々あるであろうと考えるのである。

Y教諭からも机間巡視の意味についての意見が述べられた。「何のために机間巡視を行うのか？」という問題提起である。実際、T教諭は机間巡視を行ったにも拘らず「通分」でつまづいている生徒を見過ごしてしまった。全体を見て、その上で個別指導をしなければならない生徒を的確に看取する必要がある。ただ黙々と机間巡視をしてはいけないということである。

Y教諭からはさらに生徒相互の採点についても疑問が呈された。中学生ともなるとそれが小テストであっても気にする年頃である。それを「はい、答案用紙を交換して」との指示で級友の答を合わせるのはどうだろうかというのである。小学校ではよく行われている方法であるが、確かに中学校ではあまりやらない。生徒も違和感を持っているようである。筆者もY教諭と同意見であった。

もう一つ大きなことも指摘された。それは「時間の計画と実施」である。この授業では2つの目標のうち実現できたのは初めの1つだけであり、二番目の課題についてはその緒についただけであった。いわば計画していた授業の前半しか実施できなかったことになる。往々にして計画より実際の方が長くなる。特に研究授業などでは力が入り過ぎる余りつつい長くなってしまふ。しかし毎回長くなるようなことになっては何のための「授業案」なのかわからない。計画を立てたからにはその実現に向けて気を配らなければならないのは勿論である。

このような形で最初の授業カンファレンスが行われた。

筆者にとっても初めての経験で、どのような形になるのか不安だったのだが、Y教諭やU教諭とも意思の疎通が図れて、初任者にとって有意義な話し合いになったと思う。

その後、このような形で一貫して授業カンファレンスが行われている。次第にT教諭の意識が変わり、日々授業構成に精進してくるのだが、ここでその変容を追う前に、もう一つ、上に説明した授業の翌週、5月2日の授業でのカンファレンスについて述べておきたい。

というのも、4月25日の授業が専ら授業内容に関してのものだったのに対して、この授業では学級の雰囲気、もっと言えば生徒指導全般に関わるものであり、対照的であり、カンファレンスでも生徒指導に関する筆者やY教諭の経験が語られた。

中学校の特性として授業以外に生徒指導という大きな柱が存在する。そして授業と生徒指導とは表裏一体の関係にある。筆者は授業こそが積極的な生徒指導だと考えているが、荒れている学校では徘徊する生徒に個別に対応しなければならないこともまた事実である。既に書いたように、K中学校でもかつては生徒の荒れへの対応に苦慮した時期がある。だから

教員個々の授業力の向上に力を注ぎ、和歌山大学教育学部などとも連携し、授業改善に取り組んできたとのことである。そういう経緯があるから生徒の荒れには十分に気を配っている。授業中の生徒の様子に注意し、その共通認識を図っているという現実がある。

5月2日は連休の狭間である。「昭和の日」の三連休と「子どもの日」などの三連休との狭間で、生徒たちは明らかにやる気がない。それは教室に入る前から見て取ることができた。廊下での生徒の様子が前週のそれとは違っているのだ。廊下に設えられた長椅子の上に寝そべり、チャイムが鳴れば教室に入るが、それも「渋々」という態度である。

授業開始の挨拶でも気怠そうにお辞儀をしている。着席しても私語が止まらない状態だった。

既に単元は2年生のものに入っている。「式の計算」である。ところが導入段階に入っても一部の男子生徒の私語が止まらず、肝心の内容に入れれないのだ。それを無視して授業に入るような愚を犯さない点はさすがで、T教諭は私語が止まらない生徒にやさしく話し掛けている。生徒は先生が相手になってくれるのでうれしそうに次々と話を続ける。どこでこのお喋りを止めればいいのか。早く授業に入りたいのという焦りが次第に見えてきた。

結局、授業開始後10分ほどはその生徒の相手になっていた。しかも授業が始まってからも生徒の私語は続いた。

この授業では問題を解くためにグループ活動が取り入れられていた。一つの問題について4人で一つのグループにして協議させ、過程も含めて答を出させようとするのである。しかし、私語がなくならなかったのが最後まで雑然とした中での活動となってしまった。

グループ活動については項を新たに述べることにし、ここでは生徒の私語の対応について授業カンファレンスで協議した内容を紹介したい。

生徒に落ち着きがないことはよくあることで、何も特別なことではない。今日はたまたま二つの三連休に挟まれた一日であって、生徒が集中すること自体が難しい条件になっている。その意味である程度生徒の状態を許容した対応は見事で、頭ごなしに注意しなかったのは見事である。しかしその対応が一人の生徒の勝手な呟きを認めてしまったこともまた事実である。どこでその私語に歯止めを掛けるかはその時々雰囲気や柔軟に行うしか手はない。これは経験を積み重ねていく他方法はないのではないかと。最近の生徒たちは週末に多くの予定を組み込んでいるため、月曜日に落ち着きをなくしたり、居眠りをしたりすることが多い。そんな時、生徒を授業に集中させるためにはやはり興味ある教材を用意することしかないのではないかと。また生徒を活動させるような場面を授業の中に取り入れておく必要がある。

こういう話し合いの中で、最も有効なのは校内指導教員の発言である。自らの経験を踏まえて、「こうしたらいいのではないかと」「こんな方法が有効だった」との話や聞き取りにより、初任者は実態に即した学習ができるのである。その経験談を聞きながら筆者は基本的に相槌を打ちながら初任者と共に学習するというスタンスを取った。そんなやわらかな雰囲気の中でカンファレンスを行うことができたのは幸せなことだった。

毎週毎週二人の初任者の授業を参観し、Y教諭、U教諭らと共に授業カンファレンスを行う。貴重な時間であった。そうするうちにT教諭は確実に成長していった。

具体的に書くと、まず教材と向き合うことができるようになった。教科書や指導書といっ

た既成の教材ではなく、自らが意欲的に開発した教材（いわば「自主教材」）を使って通り一遍の授業ではなく、T教諭型授業がつけられていったのである。

6月27日の授業の目標は「連立方程式の応用問題を式の立て方から考えることができる」としたもので、ここではダーツのような的当てゲームを教材として用意している。

グループ毎に分かれ、的当てを行う。その際、小さなボールを投げて、2点の的に○回、3点の的に△回当たったかを計算するのであるが、これは教科書に似たような教材があるもののT教諭が生徒が楽しんで学習できるようにと独自に考えたものである。その甲斐あって生徒は楽しみながら的当てゲームを行い、その総合得点から2点の的、3点の的に何回ずつ当たったかの式を立て、計算していた。

確かに生徒は関心を持って課題に取り組むことができている。ただ残念ながらこの課題は簡単すぎたのである。そのためすぐに解答に行き着いてしまい、生徒たちの関心が持続しなかった。協働学習の際の課題には「ジャンプの課題」を設定しなければならないとされるが、それはいとも簡単なものではないとされている。グループの全員が知恵を出し合い、時間を掛けて考え、やっと解決できるというものがふさわしいとされている。そういう意味で、このアイデアはよかったが、簡単すぎたためあまりにもあっけなく解決してしまい、生徒たちの印象に残らなかった。

こういうT教諭の積極的な姿勢は後期に入っても維持される。11月14日には珍しく1年生の授業を参観したが、ここでは比例・反比例の学習において視力検査の折に使われる「ランドルフ環」を教材として活用している。基本的には円なのだが、その一部に隙間があり、検査の時には上下左右のどの位置に隙間があるかを答えさせるあの一枚ものの紙である。

人はこの「ランドルフ環」が張られた位置から5m離れて立ち、一番上の大きな環の隙間がどこにあるか読み取れば0.1の視力となるのだが、それより近視になると被験者は少しずつ前に進むことになる。その距離は視力に反比例することを、グループ毎にランドルフ環をつくらせ、実験することで明らかにし、その関係式をつくらせようとするのである。

こうして文章に書けばなかなか説明が難しいのだが、この教材はとても魅力的で生徒の興味・関心を惹き付け、しかも関係式をつくるのが誤差もあってかなり難しく、その分だけ生徒をその気にさせるものだった。

教員の授業力は生徒にどれだけ興味・関心を持たせ、課題を解決しようとする意欲を高めるかにかかっていると考える。有田和正氏はそれを「追及の鬼を育てる」と言うが、T教諭の実践を見てきて、明らかにその力が育っていると言える。まだまだ生徒との対応、板書の書き方等に課題が残るものの、授業に関しては優れたものが垣間見えるようになってきた。今後さらに研究する姿勢を続け、生徒にとってわかりやすい授業を展開してもらいたい。

③K教諭への指導

K教諭は国語科担当で、3年生副担任である。授業を担当しているのは2年生2学級、3年生2学級の計4学級で、授業時数は14時間である。彼女もまたT教諭と同様、初任者としては教材研究等に比較的時間を割くことができる環境にあると言っていいだろう。

まず、K教諭の初期の授業について見てみよう。5月2日の2年生の授業である（K教諭は3年生の所属であるが、その授業参観は専ら2年生となっている）。

下記はこの日の学習指導略案である。

国語科学習指導案（略案）

平成 28 年 5 月 2 日（月）第 2 校時
2 年〇組 男子 18 人、女子 14 人

単元名 「メッセージをどう聞くか」
「短歌を楽しむ」

本時の目標 ①言葉以外のものからメッセージを受け取った体験とそのメッセージについて書く。

②短歌を音読し、そのリズムを楽しむ。

本時の流れ	学習活動・内容	教師の支援
導入 10 分	(前時の続き) 前時で学習した内容を踏まえて、「言葉以外のものからメッセージを受け取った体験があれば、その体験とメッセージの内容についてプリントに書く。	○例を挙げる。 ○どうしても思い浮かばない生徒には、「言葉から受け取ったメッセージを書くよう指示する。
展開 35 分	<ul style="list-style-type: none"> ・穂村弘さんの短歌を音読し、リズムを楽しむ。 ・短歌は「韻文」であることを、本文を読みながら確認する。 ・本文中の短歌 3 つのうち、好きなものを 1 つ選び、暗唱できるまで音読する。 ・短歌の情景を絵で表現する。 (漢字ワークをする)	○大きな声で音読できるまで行う。 ○ワークシートに記入するよう指示する。 ○何人か指名し、発表させる。
まとめ 5 分	本時のふりかえりをシートに記入する。	

5 月 2 日は T 教諭のところでも述べたように連休の狭間である。同じ 2 年生でもあり、この学級の生徒たちもなかなか授業に集中できない状態であった。それでも K 教諭は実にしっとりとした雰囲気ですべてに接し、授業を始める。

この指導略案でもわかるように、この 1 時間の授業は異なる 2 つの単元を扱うことになっていて、実際そういう授業が展開された。

こういうことは現実には時折ある。例えば教員の方がついつい力が入ってしまい、「これも言っておきたい。あれも言っておこう。」と扱う内容が増えてしまい、授業終了になった

時点でまだ多くのやり残しが出たり、生徒たちの話し合い活動が活発になり、時間が来ても終わらなかつたりする。そうすると次の授業に皺寄せが出るのは当然で、本時にしてもまさにまったく異なる内容の単元(この場合は「論説文」と「短歌」)を同一(時間に扱うこと)になってしまった。



K教諭の授業－机間指導を行う－

気になる場面が2つあった。

一つは授業の冒頭(指導略案では「導入」になるのだが、実際は1つ目の単元の展開となる)で、教員が「言葉以外のものから受け取ったメッセージってある?どんなメッセージだった?」と問いかけたのに対して、生徒の反応がほとんどなかったことである。これは発問自体が抽象的で難解だったことに起因すると思われるが、さらに授業が始まったばかりでその発問を受け入れる生徒の方に集中力が高まっていなかったこともあるだろう。とにかく生徒たちは思考の真空状態に入っ

たような形でポカンとしていたのが印象深い。

生徒から反応が返ってこないことをK教諭は半ば予想していて、次に発問のレベルを落とす。「言葉から受け取ったメッセージでいいから考えて」と問うのである。これもまた或る意味思考が困難な発問ではないだろうか。というのも、我々は常に言葉でメッセージを受け取っているのだから。教員からの指示もそうだし、友だちとの会話なども多くは言葉を介してメッセージが伝えられている。数多あるメッセージの中からどれか一つ発表しなければならない。どう答えていいかわからなかったのではないか。

生徒からの反応が鈍かったため、K教諭はここで自分の体験を語った。「私は春が苦手であるが、貴志川中学校周辺の滴るような緑を見て、『頑張ろう』と思った」というエピソードを語った。学校周辺の自然の素晴らしさから受け取ったメッセージを語ったわけだが、この教員の語りもまた難解だった。このようにして論説文の学習が終わった。少し急いでいたのは、「早く次の短歌の学習をしなければならぬ」という思いがあったと、後の授業カンファレンスで授業者が語っている。

ここで授業の様子がコロッと変わる。論説文から短歌へと内容が様変わりするのだから、参観していた我々し違和感を持った。恐らく生徒も同様だったのではないだろうか。

教科書には道浦母都子氏の「短歌を楽しむ」という書き下ろしの短い文章が載っていて、その中で3首の短歌が紹介されている。さらに「短歌五首」として正岡子規から俵万智までの近代・現代の5首の短歌がある。併せて八首の短歌が教材となっている。

教科書の教材に至る前に、K教諭は自らが選択した穂村弘氏の短歌を提示している。例えばこんな一首である。

「サバンナの象のうんこよ聞いてくれ だるいせつないこわいさみしい」

生徒にはとても奇異な短歌に映ったのではないだろうか。

調査をしたわけではないので確信的なことは言えないが、生徒にとって「短歌」とは堅苦しく、馴染み薄いものだろう。そんな生徒の概念を砕くような教材である。これは授業者が予想した以上の驚きを生徒に与えたようで、教室全体で生徒の「ええーっ！」という呟きが聞こえた。

ある物事に関する興味・関心は、既成概念のズレから生じるものである。短歌は重苦しくて難しい言葉が並んでいると思いついでいた生徒に「うんこ」などという言葉が入った短歌を提示することによって、生徒たちは学習対象である短歌に没入することになる。そういう意味で導入部に穂村弘氏の短歌を持ってきたことは大ヒットだった。

短歌に興味を抱かせた後、教科書の短歌に戻る。本文中の3首の短歌のうち自分の好きな短歌を暗唱する課題を出し、その時間を確保する。友だちと複数での作業も可とする。そして何人かを指名して暗唱させる。この時の生徒は「論説文」を学習していた前半よりも明らかに興味深げに楽しそうに学んでいた。改めて生徒の興味・関心を意識した教材の選択の大事さを思い知らされた。

最後にK教諭は、3つの短歌の情景をグループ毎にホワイトボードに描かせる作業を行う。これもまた面白い試みである。次の時間に生徒の興味を繋げるような作業であった。

以上のようにして1時間の授業が終わり、その後カンファレンスが行われる。

カンファレンスにおいてもそうだし、普段の授業においても、K教諭にとって校内指導教員のU教諭はとても重要な存在となっている。同じ3年生の所属であり、気軽に相談できる先輩である。

筆者もU教諭の授業を参観したが、とてもいいテンポで、小気味いいリズムを刻むような授業であった。K教諭にとってU教諭の授業を参観することは、筆者の助言などより遥かに有意義な指導を受けていることになる。例えば授業における話の「間」などは指導し切れるものではない。「授業では一方的な話し方はしないで、できるだけテンションを下げよう」などと言ったところで画餅である。身近にそれを具体的に見せてくれる人がいることで初任者の授業力は格段に進歩する。カンファレンスでも筆者やY教諭が思ってもみなかったような視点からの指導をしてくれた。それはまたU教諭自身にとっても有意義だったろう。初任者の自分の経験を語ることで、自らの授業を省察することができるし、逆に初任者の授業から学ぶこともあったとおっしゃっていた。

このK教諭が夏休みを境に大きく変わった。生徒を前にして話をするとき、それまでは語尾を濁らせたり、力なく喋っていた時もあったりしたのだが、9月の授業からとてもハキハキとした話し方になったのである。それだけで自信が付いたように、頼もしく思えたものだ。本人にそのことを言うと、「意識しています」という返事が返ってきた。心に期すものがあったのだろう。一段階確実に成長したように思えた。

何が原因で彼女をしてそう変容させたのかはわからないが、少なくともそれまでの指導の結果ではないと思う。しいて言うならばK中学校の環境なのではないだろうか。K中学校には相互に指導をする、されるという同僚性に富んだ土壌がある。その影響を受けた結果の変容ではなかったか。

K教諭にしてもT教諭にしてもそういう土壌の中で日々成長している。二人とも自らの資質に加えて同僚から謙虚に学ぶ姿勢を保持し続けることによって、より素晴らしい教員に

なることだろう。

(2) U中学校における初任者指導

①概要

K中学校が紀の川市南部の全域を校区に含む学校であるのに対して、U中学校は紀ノ川北岸の西部を校区とする。各学年4～5学級の、K中学校より一回り小さな中学校である。

U中学校の大きな特色の一つに特別支援学級在籍生徒の多さが挙げられよう。それは地域からの学校に対する期待との表れと理解できよう。ただ子どもたちは特別な対応が必要だったので、全教職員が様々な面でその対応に追われていた。K校長は特別支援学級の運営に心を配り、筆者も相談を受けたことがあった。そこで同じ和歌山大学教育学部に勤務する元県立特別支援学校の校長を紹介し、指導をしてもらったこともあった。こういうことができるのもメンター制のいい面であろう。

また、U中学校では年度途中から採用2年目、3年目の若い教員たちへの指導も依頼された。その段取りは二人の初任者の校内指導教員であるK教諭がしてくれ、彼女も含め今後のU中学校の中核的な存在になるであろう先生方の授業を見る機会を与えていただいた。今のところ、4人の若手教員の授業を毎週参観させてもらっていて、頻度にすれば月に一度という少なさだが、それでもそれぞれの個性ある授業を見て、短時間だが振り返りも行っている。この間隔をもっと頻繁にすればメンター制の充実にも繋がれると考えている。

U中学校にも2名の初任者が配置されている。

社会科のH教諭は1年生の副担任で社会科担当、1年生の4つのすべての学級の社会科と3年生の1学級の授業を持っている。併せて持ち時間は16時間である。また、学年の生徒指導も担当しており、週に1時間、生徒指導担当の会が設けられている。

英語科のT教諭は1年生の担任で、1年の4学級すべての英語の授業（16時間）を担当し、道徳と学級活動も1時間ずつ担当する。彼女は筆者が担当する4人の初任者の中で唯一学級担任である。そのため年度途中には担任ゆえの悩みも経験している。

二人とも数年間の講師経験を経て採用された前向きな姿勢に好感の持てる若者たちであった。

また、初任者研修における拠点校指導教員はK中学校のY教諭であることはK中学校の初任者二人と同じである。校内指導教員は若手教員の授業参観を段取りされている英語科のK教諭である。

②H教諭への指導

筆者は中学校の社会科の教員であった。中学校ではやはり教科主義的なところがある。勿論、授業構成や発問の仕方、資料の提示方法、教材開発等については教科を超えた共通点が多々あるのだが、いざ指導するとなると自らの専門教科以外については自ずと通り一遍のものになる傾向にある。だからY教諭や二人の校内指導教員に頼ったところも多々ある。

社会科については、これまでの教員生活の中で培ってきたノウハウもあり、また長年社会科教育について研究・実践してきた自負もあり、自信を持って指導できる教科である。そしてH教諭は向上心旺盛で何事も吸収する柔軟な発想力を持った初任者だったから、指導助言がすんなりと浸透していたようだ。

彼の最初の授業を参観した時、「これが初任者の授業のレベルか」と驚いたものである。U中学校への最初の訪問時だった。まだ指導略案は用意されていなかったのも、自分のノートに授業記録を取ったのだが、そこにはかなりの誉め言葉が並んでいる。

この授業は入学して間もない1年生の授業開始から1週間ほど経過した頃のもので、授業の目標は「地球上の大陸と海洋のおよその位置が分かる」で、世界地理を大観させるものであった。授業の流れは次の通りである。

生徒たちをグループ別に座らせる。そしてグループ毎に手製のジグソーパズルにした世界地図を配り、それを完成するよう指示する。なかなか捗らないグループにヒントを与えながら、すべてのグループが完成するのを待って、次にその世界地図から「イギリス」と「インド」の位置を探させる。

ここで生徒に前を向かせ、デジタル教科書所収のメルカトル図法の世界地図をスクリーン上に映し出し、主な大陸名と海洋名を答えさせる。さらに今度は東京を中心とした正距方位図法の世界地図を映し、そこに表されていない大陸名をグループで考えさせた。

U中学校では授業スタイルに特にきまりを設けていない。一斉指導が多いようだが、教員によってはグループ別の学習にも取り組んでいる。H教諭は意欲的にグループ学習を取り入れ、考えさせる授業を構成しようとしている。机の並べ方が不十分であるなど改善すべき点はまだ幾つかあるのだが、こういう授業に挑戦しようとする意欲は素晴らしい。

また、手製の教材を用意していることも評価できる。世界地図や日本地図のジグソーパズルは既製品として購入できるのだが、かなり高価になるのでなかなか学校に常置するのは難しい。それをグループの数だけ手製でつくるのだから大したものである。この手製のパズルによって生徒たちの興味が一挙に増したように思える。

授業の長所としてICT機器の活用も挙げていいだろう。筆者が和歌山市の中学校長をしていた時、総務省・文部科学省の合同事業である「フューチャー・スクール」の研究指定を受けたことがあった。すべての生徒がタブレットPCを持ち、すべての教室に電子黒板を置き、授業改善に取り組んだのである。タブレットPCはさておき、電子黒板が授業の可能性を広げたことは明らかである。そのためにはデジタル教科書が必置だが、このデジタル教科書=電子黒板を併用することによって、授業改善は圧倒的に進んだ。それは教員の側からもそうだし、生徒にとっても「授業が分かりやすくなった」との意見が大半だった。H教諭はさすがに若者だけあってICT機器の扱いにも慣れており、常にワゴンにPC・プロジェク



H教諭の授業—グループでパズルを考える—

ター・スクリーンを入れて教室から教室を移動していた。デジタル教科書も赴任してすぐに用意したようだ。

そして最後に強調したいのは、「地図上にない大陸は何大陸か？」という問いを発していることである。社会科の授業において、例えば世界地図を提示し、「この大陸は何？」「この海は何？」と生徒に発問することはしょっちゅうである。それは記述的知識を訊ねる発問であって、決して考えさせる問いにはなっていない。現在「思考力」や「判断力」を重視することは学習指導要領にも記述されていることで、何も目新しいことではない。しかし社会科においては往々にして一問一答の授業形式が幅を利かせている。そこでは知識として「持っているかないか」で答えられるものばかりで、それをどれだけ積み重ねても「思考力」の育成には繋がらない。しかし、「表されていない大陸」を答えるためには、生徒はこれまでの授業で身に付けた地理的な要素をすべて動員して、「あれかな、これから」と考えなければならない。協同学習で言うところの「ジャンプの課題」に当てはまるような問いなのであり、それが協同学習について何の予備知識も持たないH教諭が経験的に発していることが素晴らしいのである。

今、こうしてH教諭の最初の授業を思い返していると、何の指導もない中でこういう授業を行えたその能力の高さに驚くのである。

勿論、欠点もある。例えば板書の内容と配付したプリントとの関係の整理のなさである。H教諭は一貫して自作のプリントを生徒に配付して学習を進めているが、板書をノートに書けばいいのか、プリントに書き込めばいいのか、生徒は混乱しているように見えた。ただこのことはカンファレンスの中で指摘するうちに改善されている。ノートに記入するような内容もすべてプリントに書き込むように改善されている。

このようにして地理的分野の学習は順調に進んでいった。

5月の連休が終わった頃だったと記憶しているが、一つ大きな指摘をした。

授業を見ていて内容に脈絡がないのである。教材の扱いは巧みなのだが、それは教材の一つ一つであって、1時間の授業として見た場合、統一した授業構成になっていないのである。それを言うとH教諭自身も「そう思っている」との返事。その原因は教科書の教材の並び方に合わせてしまっていることに原因があると指摘した。教科書というのはあくまでも「主たる教材」であって、何もその構成通りに授業を合わせる必要はないのだ。自主的な教材を使っているのだから、教科書の内容記述の順番が「A-B-C」というものであっても、生徒にとっては「A-C-B」の方が理解しやすいと考えれば自主的に入れ替えてもいいということを行った。「ああ、そうですか」と納得した様子で、早速次の授業からは教科書のページを追うことをせず、小単元を入れ替えて、つながりのある授業を目指していた。

夏休みも近付いた7月12日(火)、筆者がU中学校で社会科の授業を行った。単元はヨーロッパ州、直前にイギリスのEU離脱という衝撃的な出来事があったので、それを踏まえて「EU」を扱うことにした。

この授業がどういう経緯で実現することになったのか、実はよく覚えていないのだ。多分、「一度、示範授業をやろうか」という簡単な呟きからだったと思う。筆者の協同学習を意識した授業を見てもらうことで、いい意味でも悪い意味でも参考になるだろうと考えたからである。それが和歌山大学教育学部の教職大学院で学ぶ学生まで参観することになったのはまさに汗顔の至りである。筆者はU中学校での初任者研修、メンター制に関わる教員ぐら

いを想定していたのに思わぬ大人数になってしまった。

ここでは授業の詳細は省くが、H教諭には参考になる授業だったのではないかと自負している。

しかし、その後、「自分の授業はまずくなった」とH教諭が思い込むようになってしまった。特に地理的分野から歴史的分野に入ってからはその傾向が顕著になっている。誰しもが時として陥る落ち込みである。筆者などは採用後10年ほどしてそう思い、授業改善を考えたことがあったのだが、採用3～4か月後に自省の念に捉われたことは或る意味凄いことなのではないか。

大きな原因は心理的な面ではないかと考えている。というのもH教諭はもともと「歴史が苦手なんです」と言っていた。そして最初の歴史的分野の授業で予想していた生徒の喰いつきがなかったから落ち込んでしまったというわけだ。それが今に至るも引き摺っているのではないか。ただ本人が悩むほどのひどい授業ではないのだが、真面目なだけに考え込んでしまっている。

社会科は地理的分野、歴史的分野、それに公民的分野と3つの分野に分かれている。分かれてはいるがそれは社会科として一つに括れるものである。地理的分野はあくまでも分野であって「地理学」ではないし、同様に歴史的分野も「日本史」や「世界史」ではないのである。社会科というのはあくまでも地理や歴史等について思考し、認識するものであって、根っこは一つなのである。だから歴史的分野になったからといって授業構成を変える必要はなく、これまでと同様に教材研究を行い、自らが開発した教材で授業をすればいいのだと説いている。

授業者に自信があろうとなかろうと生徒たちは授業を受けるために教室で待っている。その生徒たちの期待を裏切らないように努力はし続けなければならない。そういう意味でH教諭は努力を続けている。12月の授業でも筆者が考え付かなかったような切り口で教材をつくっている。この態度を続ける限りさらなる飛躍ができると筆者は確信している。

③ T教諭への指導

T教諭は英語科の教員であり、筆者が担当する4人の初任者の中では唯一人の学級担任である。そのため本来は道徳や学級活動といった領域面についての指導も必要なわけだが、他の初任者と共通のカンファレンスを実施する中で、専ら授業中心の指導となってしまう、道徳等については今後の課題となる。

現在、英語の学習については既に小学校でも行われている。ただし、正式な教科となるのは次期学習指導要領が実施されるようになってからで、今は「総合的な学習の時間」の中で行われている。

U中学校で筆者の席の隣にALTが座っていて、時々日本の教育などについて話をするのだが、彼は中学校だけではなく小学校にも派遣されている。そこでは専らゲームをしながら「英語に親しむ」ことを重点にして高学年の担任と共に授業を行っているという。

中学校では小学校での実践を受けて、体系的な英語を学習することになる。そこではオーラルコミュニケーションが重視されているようで、T教諭の授業を参観してもある程度ルーティン化された流れになっている。5月10日に行われた授業の略案を紹介しよう。

英語科学習指導案（略案）

平成 28 年 5 月 10 日（月）第 2 校時

1 年〇組 男子 18 人、女子 13 人

単元名 「Unit 0 アルファベット」

本時の目標 ①英単語を発音に気を付けて読むことができるようにする。

②正しいスペルで英単語を書くことができるようになる。

本時の流れ	学習活動・内容	教師の支援
導入 10 分	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ ・曜日の確認 <ul style="list-style-type: none"> ・今日の月日、天気、今日のゴール、予定の確認 	<p>○個別対応について</p> <p>H 君はなかなかしんどそうで、ていねいに取り組めていない。さりげないサポートを心掛ける。</p>
展開 35 分	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取りトレーニング(リスニング) ・高速インプット(ペア学習)、ペアフェクトノートへの記入 ・単語プリント、単語カード取り 	<p>○学級集団対応について</p> <p>声の出る生徒が偏ってきている。全体での発音練習を心掛ける。また、班になる時、机の間に隙間ができないよう気を付ける。</p>
振り返り 5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・今日学んだ英単語の確認、今日のフィードバックへの記入 	



T 教諭の授業—みんなで英語を使おう—

略案にも書かれているように、英語科の授業の導入場面はほぼ毎時間一定である。それは 4 月当初から現在に至るも変わっていない。

「Good morning(afternoon)」で始まり、その日が何月何日であり、何曜日であるのか（筆者が参観する日は常に火曜日であるが）、天気は「fine」か「rainy」か「cloudy」のどれなのかを、生徒を指名して答えさせる。そして黒板の左下隅に「本日のメニュー」を明記し、これは終われば横線で消していく。

展開部分でも初めはやはりルーティン化されていて、CD 若しくは電子黒板を活用してリスニングを行う。そのために必要なワークを生徒たちは持っているから、そこに書き込みながら実際の英語を聞いている。次にペアになり、「高速インプット」を行う。生徒 A が決められた英短文の問題を読み、生徒 B が解答を読み上げる。決められた時間内にどれだけこなすことができるかを図ることになる。

そしていよいよ教科書の本文に入るのだが、この授業の時点ではまだ教科書の内容に深く入っておらず、専らアルファベットの習得に専心するのである。

だから、授業は或る程度事前に敷いたレールの上を列車が走るように進む。ただその列車の進行は一定ではなく、スムーズに進むこともあれば、逆に急停車することもある。それは当該授業の中での生徒の反応による。小学校で英語に親しんでいるとはいうもののまだまだ英単語をローマ字読みでしか発音できない生徒もいるし、AからZまで言えない生徒もいた。

最初の授業カンファレンスで指摘したのは、テンポが速すぎるのではないかということだった。テンポのある流れでスムーズに授業は流れているのだが、次から次へとメニューが途切れないから、生徒に考えさせるような場面が出てきた時、対応できなくなるのではないかと思ったのだ。

カンファレンスではK中学校のU教諭と同じように、校内指導教員のK教諭の存在が貴重だった。「私だったら……」という留保付で多くのワザを示唆してくれた。一斉指導の大事さもその一つだったし、教科書の扱い方などについても初任者にわかりやすいように話をしてくれた。また、T教諭も何度となくK教諭に相談し、その上で略案を書き、授業をつくっていった。身近にこういう教員がいることの大切さを痛感した。

T教諭は授業の中で一人の生徒に注目している。いわゆる「抽出児」と言っていいたいだろう。彼は英語科の授業だけではないのだが、とにかく物事に集中するのが苦手な生徒である。そのためアルファベットの読みも定着せず、書くこともままならなかった。そのため、授業中、何度も彼の傍に寄り添い、いちいちやるべきことを確認させていった。おかげで時には授業に積極的に関わるような姿勢を見せたこともある。ただ今でも全体的には無気力な状態でもある。これからもこの生徒をていねいに見取りながら全体の指導を行う日々が続くことだろう。

T教諭の授業カンファレンスにおいては筆者として反省すべき点がある。それは、全体を見通した指導助言ができていないことである。やはり教科の壁ということになるのだろうか、専門的な知識や方法がない分だけ、その日の授業で気になったことだけを論じ、本当に些細なことだけしか俎上に載せなかったのではないか。もっと初任者の成長に資するような全体を俯瞰した指導を行いたかった。学校を訪問する機会は今あと6～7回になっている。その数少ない機会を捉えて、これまでできなかった指導を心掛けていきたい。

4 初任者を通して見たメンター制

これまでメンター制の指導に関わることを、専ら初任者への指導と関連付けながら語ってきた。

その説明で十分お分かりだと思うが、メンター制とはいうもののその実は初任者への関わりが大半だった。専ら初任者の授業を参観させてもらい、その授業構成について、その授業方法について（協同学習の方法論の示唆が多かった）、発問の仕方、或いはまたその授業の中での生徒指導の在り方などについて、その後の授業カンファレンスの中で、できるだけのことを指導してきたつもりである。

しかし、果たして筆者の指導によって初任者にどれだけのことができたのかと言われれば、確とした自信はない。また初任者がどれだけ成長したかと問われても、それを裏付ける数値を示すことはできない。あくまでも主観的な物言いしかできない。

何の具体的な証拠も示せずに言うのは恐縮だが、年が改まって最初に初任者の授業を見た

時、「着実に成長している」という実感を持ったのだ。昨年12月の授業参観からほぼ3週間経っている。これまで毎週のように見てきた彼や彼女の授業からかなりの間隔が開いた。それゆえにわかったことなのではないだろうか。4月当初に見た授業と比べて、生徒に対する態度や言葉の遣い方、板書の方法、練られた発問等、明らかに違っていた。2年目への飛躍が期待できる姿があった。

彼らが成長した主たる原因は「学校」にある。校長や教頭の指導はもとより校内指導教員など彼らを取り巻く学年の教員の尽力があってこそその成長である。そしてこの初任者を取り巻く教員をメンターと呼ぶならば、このメンターの教員の成長がなにより初任者を育て、その学校をより素晴らしい学校に押し上げていくことになるのではないか。

筆者が訪問させてもらった二つの中学校では、当然のことのように授業が開かれていた。どの教員の授業も筆者は気軽に参観することができた。それは初任者にしてもそうだったはずだ。

佐藤学氏は「自分の仕事を見せたがらないのは、泥棒と先生だけ」という箴言を述べ、「授業を開くことでしか授業は改善しない」と言っている。「少なくとも年に一度は研究授業をすべきである」とも提言している。確かに自らの授業を外に対して閉じていれば教員の成長はない。すべてをさらけ出すことによって授業力は向上するのである。そしてそれは同僚性の構築があって初めて学校全体に普及するのである。

筆者はメンター制によって育てるべき資質は個々の授業力であり、学級経営力であり、生徒指導力など多岐に亘ると思うのだが、一人一人がそういう資質を向上させることで培われる同僚性の構築こそが究極の目標だと考える。そういう観点からすれば、多くの教員に関われなかったことからまだまだ不十分なことしかできていない。初任者や校内指導教員とは意思疎通を図れているが、もっと多くの教員と様々なテーマで話し合っていきたい。

5 おわりに

教員生活を和歌山市で過ごしてきた筆者にとって、週に一日ずつとは言いながら、紀の川市の中学校に訪問するということが、正直緊張感を持ち取り組んでいた。いい経験をさせてもらった。そして今9か月が経って、この二つの中学校の先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。

職員室の中に机を用意していただいて、寂しそうに座っているように見えたのかどうかはわからないが、筆者に暖かい声掛けをしてくれた。転校してきた生徒がクラスメートから一声掛けてもらおうとホッとするというけれど、その転校生の気持ちがしみじみと理解できたものである。

事務の方には、週に一度の訪問なのに給食の手続きまでしていただいた。面倒な手続きだったのではなかろうか。おかげで昼食時に隣の生徒指導主任の先生（K校）やALT（U校）と楽しく話をしながら食べることができ、生徒指導に関する情報やイギリスについての情報を仕入れることができた。

さらに、両校の生徒たちにも感謝したい。生徒があって初めて授業は成り立つものである。真面目な子、やんちゃな子、物静かな子……、机の間を歩いて学習の邪魔をし、迷惑を掛け

た子もいた。申し訳ないと思う。

また、U中学校では筆者が社会科の研究授業をして、あの学級の子どもたちはさぞかし面食らったと思う。突然「和歌山大学からやってきました。授業をします」と言って強引に授業をしたのだから。

両校の子どもたち、校長先生をはじめとする教職員の方々、そして紀の川市教育委員会の関係者の皆様に感謝申し上げます。

紀の川市立打田中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
4	19	H	1	社会	地球上の大陸と海洋	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器の活用が顕著な授業。さすが若者である。 グループ学習を展開している。カンファレンスで協同学習の梗概について話をした。 手製のジグソーパズルはよかった。 	
		T	1	英語	アルファベット	<ul style="list-style-type: none"> 発問に答えた生徒の列をずっと指名していくという指名の仕方はやらない方がいいのではないか。 課題に答える生徒の速さには差がある。時間のかかる生徒への対応をもっと丁寧に。 	
5	10	H	1	社会	地球上の大陸と海洋	<ul style="list-style-type: none"> 内容が①日本と正反対の位置にある州はどこ？②アメリカ合衆国の位置は？③オセアニア州の国々の国旗にイギリスの国旗が含まれているのはなぜ？という難解な課題があり、これに答えるのはとても厳しい。 	
		T	1	英語	英語の単語	<ul style="list-style-type: none"> ベア学習からグループ学習へ、また個別の活動へ等の移行が極めてスムーズにできている。これも普段から常に行っているからだろう。 	
	17	H	1	社会	地球上の大陸と海洋	<ul style="list-style-type: none"> 先週も指導したことだが、今日も内容がこま切れになってしまった。この原因は教科書に忠実に沿った授業をやるからではないか。自分で教材の並び替えをすることも時として必要である。 	
		T	1	英語	アルファベット/英語での自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> 異なる内容の単元を一つの授業で行うというのは無理がある。 上記も含めて、授業構成について英語科でも社会科でも共通に指導した。 	
	24	H	1	社会	温帯で暮らす人々	<ul style="list-style-type: none"> 「なぜ」疑問が社会科を貫く問いにならないといけない。「どう」「どこで」という疑問はこの次でよい。 常にグループ学習を意識しているのはいいことだと思うが、内容によって一斉指導も必要である。 	
		T	1	英語	英語での自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> (校内指導教員から)「call me～」という言い方は極めて難しい。もっと丁寧に指導するべきである。 「サイコロトーク」は面白い試みである。 	

紀の川市立打田中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
	7	H	1	社会	乾燥帯で暮らす人々	<ul style="list-style-type: none"> 雨温図の読み取りは資料活用能力の基本となるものであるから、もう少し丁寧に指導すべきである。 グループでの話し合い活動が低調である。話し合う課題の内容を考える必要がある。 	
		T	1	英語	英語での自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> これまでの指導を自分なりに活かしているのか、今日の授業はとてもスムーズで、生徒の集中力も増していたように思える。 	
6	14	H	1	社会	アジア州の自然と人口	<ul style="list-style-type: none"> 授業にヤマ場がなく、平板に過ぎてしまっている。 原因と結果が逆転しているところが見られた。きちんとした教材研究が必要である。 	
		T	1	英語	be動詞	<ul style="list-style-type: none"> (校内指導教員から) be動詞の指導についてはもっと時間を掛けておくべきではないか。ここでbe動詞をきちんと理解しておかなければ、一般動詞の理解が困難になる。 	
	28	H	1	社会	アジア州の国々の課題	<ul style="list-style-type: none"> 2限と5限で同じ内容の授業を参観した。2限終了後に「話し合い活動では時間を切ること」と指導して、5限では実際にその通りやったところ、話し合い活動が活発になった。長い時間だからだとやってはダメということだ。 	
		T	1	英語	be動詞	<ul style="list-style-type: none"> be動詞について説明する過程で「a」と「an」の使い分け方を説明したが、生徒にしてみれば焦点がぼかされた感じがするのではないか。今はbe動詞に限定して説明した方がいいだろう。 	
7	5	H	1	社会	西アジアの国々	<ul style="list-style-type: none"> 教材研究で「インド」についてのものが不十分。資料の読み取りにしても浅い。 OPECの説明でアルファベットの説明が間違っている。「0」はoilではない。 	
		T	1	英語	一般動詞	<ul style="list-style-type: none"> 学習する内容が多過ぎる。一般動詞については初出なわけだから、ここで十分な時間を掛けて説明しなければならない。内容が多い時はそれを2時間に分けて学習してもいい。臨機応変に。 	

紀の川市立打田中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
7	12	鈴木	1	社会	EUについて	示範授業
	19	H	1	社会	EUについて	
		T	1	英語	be動詞と一般動詞(復習)	
9	6	H	1	社会	EUの抱える課題	
		T	1	英語	自己紹介(ALTとのT.T)	T.T
	13	H	1	社会	アメリカ合衆国	
		T	1	英語	ものの数え方	

紀の川市立打田中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
9	27	H	1	社会	アマゾン川の開発	
		T	1	英語	形容詞	
10	11	H	1	社会	オセアニア州	
		T	1	英語	三単現のs	
	18	H	1	社会	歴史を学ぶ意味	
		T	1	英語	三単現のs	
	25	H	1	社会	出張のため授業なし	
T		1	英語	三単現のs		

紀の川市立打田中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
11	8	H	1	社会	日本列島の誕生と大陸との交流	・本時の目標として「権力について考えることができる」とあるが、これは中学生のレベルとしては相応しくない。もっと生徒のレベルを考えて目標をもっと具体的なものにすべきである。	
		T	1	英語	WhoやWhatを使った疑問文	・自作のプリントを配付し、理解の定着を図ろうとしているのはわかるのだが、その扱い方が不十分である。	
	15	H	1	社会	稲作の始まり	・縄文時代と弥生時代の想像図(イラスト)を提示し、それを比較させてその時代の特色を掴ませようとする導入部はわかりやすかった。	
		T	1	英語	Whoseを使った疑問文	・午後から「狂言の鑑賞会」が予定されていて、授業が変則になり、そのためT教諭の授業は参観できなかった。	
	22	H	1	社会	大化改新	・「大化改新」と「乙巳の変」を混同してしまっているのではないかと。よく間違えるところなので、教材研究で確認しておかなければならない。	
		T	1	英語	人称代名詞	・当該クラスの朝のHRがかなり長引き、授業が30分ほどになってしまった。これでは思い通りの授業ができなかったのは致し方ないことである。	
	29	H	1	社会	平安遷都	・歴史的分野に入ってから説明を中心とする授業になっている。歴史的分野の学習の冒頭に言ったように「なぜ」疑問を中心にして授業の構成を考えてもらいたい。	
		T	1	英語	テスト調べ	・多くのプリントを用意してのテスト調べであり、その分、生徒も意欲的に取り組んでいた。	

紀の川市立打田中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
12	6	H	1	社会	武士の興り	・導入部で地元の教材である「粉河寺縁起絵巻」を提示したが、生徒の反応が鈍かったのが残念である。 ・全体の流れは生徒の関心を惹くようになっていた。	
		T	1	英語	病休		
	13	H	1	社会	律令政治の始まり	・「五畿七道」についての授業者の理解が誤っていた。この時代の「道」はいわゆる街道を指す言葉ではなく、地域を示すものだと理解しておくべき。	
		T	1	英語	現在進行形	・当該クラスの生徒の規律のなさをテーマとして議論した。学年会で現状を説明し、学年の教員で共通理解を図ることが必要である。決して一人で悩んではいけない。	
1	17	H	1	社会	鎌倉時代の武士の暮らし	・はっきり言って教材研究が甘い。もっと突っ込んだ教材研究が必要である。また、授業の視点が余りにも自分勝手なものになっている。生徒の活動を第一に考えて授業を構成すべきである。	
		T	1	英語	否定の命令文	・一定の授業の流れが確立できてきたようだ。1授業単位のルーティーンが出来上がったと言うべきか。次はこれを壊す作業が待っている。	
	24	H	1	社会	南北朝時代	・生徒の知識が不十分だと観点から、「予習プリント」を「復習プリント」に切り替えた。それはそれで一つの方法だが、肝心なのは授業だということを忘れないでほしい。	
		T	1	英語	canの使い方	・ルーティーンは一般的なものである。今度は杖村流の授業のやり方を考えてほしい。	大雪の為途中からの参観

紀の川市立打田中学校

月日		主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他
		個人名	学年	教科等	単元名など		
1	31	H	1	社会	勘合貿易	・細田客員教授から一般的な視点から指導を受けた。一つは生徒との会話が友だちのようだと指摘。もう一つはポケットに手を突っ込まないことというものだった。	
		T	1	英語	canの使い方	・授業も落ち着いており、生徒への指示も的確である。まとまってきたという感じである。	
2	7	H	1	社会	室町時代の村の自治	・本日のカンファレンスは、担任をしている杖村教諭の悩みについて協議を行った。授業については触れていない。不登校の生徒に対して学級の他の子どもたちにどう説明するかというものだったが、懸命になっている余り性急になってしまっている。心に余裕を持って取り組んでもらいたいと結んだが、果たしてどれだけ参考になったものか。	
		T	1	英語	動詞の過去形について		
	14	H	1	社会	戦国大名	・戦国大名の代表として「武田信玄」と「上杉謙信」を取り上げ、分国法などに言及している。それは面白い展開だが、この二人だけの説明で戦国大名を説明したことにはならないのではないか。	
		T	1	英語	一般動詞の過去形について	・不規則動詞を「変身動詞」として生徒に興味を持たせるような工夫をしている。ただし、動詞の変化を覚えるのは生徒一人一人の努力しかない。	
	21	H	1	社会	朝廷と幕府について	・「メンター制」に係る最後の訪問ということで、二人の初任者に対して、本年度の「成果と課題」、そして来年度に向けての「抱負」を述べてもらった。	
		T	1	英語	一般動詞の過去形について	・二人ともこの一年間で様々な悩み、そのゆえに成長できたと考える。これからも頑張ってもらいたい。	

紀の川市立貴志川中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
4	18	K	2	国語	少年メッセージを書こう。	・初任者とは思えないほど落ち着いた授業態度だった。 ・時間配分があやふやである。そのため終わりに十分な時間がとれなかった。 ・机間指導の際の指示の言葉がやや曖昧だった。	
		T	2	数学	1年生の復習(単項式、多項式の次数について)	・教科書と副教材の二つを交互に使いながらの授業で、生徒にとってめまぐるしく感じたのではなかったか。 ・指導が単調であったので、「協同学習」のノウハウについて説明しておいた。	
	25	K	2	国語	メッセージをどう聞くか。	・時間配分についての配慮が足りない。導入部での漢字の書き取りに時間を掛け過ぎ。 ・グループ別学習と協同学習の違いについて。ただグループに分ければ協同学習になるわけではない。	
		T	2	数学	「数」×多項式、「多項式」÷数の計算ができる。	・復習の必要性の確認。「通分」を理解していない生徒がいた。できるだけ幅広く生徒を見ることの重要性。	
5	2	K	2	国語	短歌を楽しむ/短歌五首	・前時に積み残しの単元があったため、1時間の授業が二つに分かれてしまった。授業時間の配分に関する事なのでなくすることができるはず。注意しよう。	
		T	2	数学	式の計算	・連休の狭間であるため、生徒に落ち着きがなかった。そういう場合に授業者としてどのようなことに気を配らなければならないかについて話し合った。	
	9	K	2	国語	短歌を楽しむ/短歌五首 ～短歌の鑑賞文を書こう～	・教科書にない短歌を導入部を持ってくるのは生徒の興味を惹くもので良かった。 ・その後、教科書に載っている短歌すべてを扱おうとすることに無理があるのではないか。	
		T	2	数学	式の計算	・生徒への説明が独りよがりになってはしないか。生徒の反応を見て説明をすることが大切である。 ・この授業の肝心なところはどこなのか、自分が事前に考えておくこと。	

紀の川市立貴志川中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
5	16	K	2	国語	方言と共通語	・自作の教材「和歌山弁プリント」は生徒の動機付けには有効であった。 ・ペア学習とグループ学習を組み合わせる授業で意欲的なものだが、その目的をしっかりと意識することが大事。	
		T	2	数学	文字式	・グループ学習をすることで生徒たちが互いに学び合う態勢を確保しようとしている。ただグループの中での一人学習が多く目立った。グループの機能を高めるためには何が必要か考えてもらいたい。	
	23	K	2	国語	テスト調べ	・これまで学習してきた内容を振り返ることが中心だったが、ある程度生徒の自主性を尊重していた。	
		T	2	数学	文字式	・グループで課題を考えさせるのだが、多くのグループで教科書の模範解答を書き写していた。せっかくのグループ学習が勿体ない。	
	30	K	2	国語	テスト返却	・答案用紙を返却し、丁寧に問題の解説を行っている。教員によってテスト返しには異なる考え方があがるが、こういう返却をすると後々の参考になると思われる。	
		T	2	数学	テスト返却	・模範解答をプリントにし、生徒に配付する。その上で説明を加えていたが、生徒に落ち着きがなく、雑然とした雰囲気になった。	
6	6	K	2	国語	字のない葉書	・生徒の音読の声が小さい。声を出させる工夫が必要。 ・グループに分けて活動させる場合、もっと互いの机をきちんとくっつけるように注意してほしい。	
		T	1	数学	正負の計算(小テスト)	・突然の時間割の変更で1年生の授業～それも小テスト～の参観になってしまった。	テスト参観

紀の川市立貴志川中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
6	13	K	2	国語	卒業ホームラン	・ホワイトボードへの板書はできるだけ生徒の様子を見ながら書こう。	
		T	2	数学	連立方程式～代入法で解く～	・導入部で代入法を説明する時、比喻として使われた表現は難解である。生徒は納得できていなかったようである。 ・グループ学習なのに個人に1枚プリントが配られている。これでは協同学習にならない。	
	20	K	2	国語	卒業ホームラン	・平板な授業で、生徒は退屈そうにしていた。それをK自身も感じ取って焦っている様子が見え見えだった。教材の工夫が必要である。	
		T	2	数学			学校の都合で授業が割愛された。
	27	K	2	国語	テスト調べ	・できれば次からは学校訪問の際にはテスト調べは避けるように要望する。	
		T	2	数学	連立方程式の応用	・とても工夫に富んだ授業であった。このように教材を開発し、活用するような授業を心掛けていってもらいたい。	
7	11	K	2	国語	鯉節～世界に誇る伝統食～	・今日の穴埋めばかりのワークシートは生徒の興味関心を喚起しない。ワークシートの活用を否定するものではないが、活用しやすい工夫が必要である。	
		T	2	数学	一次関数	・オリジナルなアイデアで授業をつくっている。授業そのものは生徒の集中力を欠くことになってしまったが、こういう姿勢はいい。	

紀の川市立貴志川中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
9	5	K	2	国語	哲学的思考のすすめ	・「恥ずかしいエピソード」がその後の自分に役立つことを想起させるのだが、なかなか生徒から意見が出ず困っていた。素早い対応ができるように心構えが大事。	
		T	2	数学	一次関数のグラフ	・導入部が面白いものになってきた。自分なりの努力ができている。この調子で頑張してほしい。	
	12	K	2	国語	反対意見を想定して意見文を書く	・保健体育の授業が長引いて授業開始がかなり遅れた。生徒の集中力も欠けていた。こういう時の授業の対応について意見交換を行う。	
		T	2	数学	一次関数のグラフ	・なぜか今日は生徒に落ち着きが見られず、国語科の授業と同様、カンファレンスでは専ら生徒指導の観点から協議を行った。	
	26	K	2	国語	文法～用言の活用について～	・文法の指導はどうしても教え込みになってしまう。こういう単元ではしっかりと教え込むこともまた必要である。	
		T	2	数学	一次関数のグラフ	・授業時間中グループ学習に充てられていた。グループ学習も少しずつ内容が伴うようになってきている。生徒たちは落ち着いて取り組んでいた。	
10	3	K	2	国語	文法～連体詞について考える～	・1週間前と同様、文法は基礎基本をきちんと教え込んでおかなければならない。それはこれまで言及してきた協同学習の対極にあるわけだが、その切り替えも大事である。	
		T	2	数学	一次関数の応用	・定期テストの答案の返却と授業を同一時間内に行うことは課題が残る。テスト返却の後、場面転換をしっかりとしなければ生徒は授業に集中しなくなる。	

紀の川市立貴志川中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
10	17	K	2	国語	枕草子	・生徒の意欲を喚起し、枕草子の暗唱をさせている。 ・授業時間内に枕草子第一段を全員が暗唱できたのはよかった。心から生徒を誉めていた。それが生徒にも伝わっていると思われる。
		T	2	数学	一次関数の応用	・グループ学習が定着してきた。特に最初の課題「xを使ってD-P間の長さをどう表すか」について話し合う場面は有意義だった。
	24	K	2	国語	枕草子	・今日の授業は全般に亘って教員の説明が中心であった。 ・文法の授業とは違うのだから工夫してもらいたい。 ・現代語訳をしているが、教科書の記述とほぼ同じなので他の本の訳に当たるなど教材研究をしてほしい。
		T	1	数学	変数と関数の意味	・ブラックボックスという教材を活用しているのは面白い。 ・こういう教材を使うとどうしても時間が長くなる。その対応を事前に考えておくべき。
	31	K	2	国語	枕草子	・時間配分がまずかった。ヤマ場として「をかし」を生徒に考えさせ、さらにグループで協議し、ひいては清少納言のもの見方について考えさせることをポイントとしていたのだが、解説に時間が取れできなかったのが残念。
		T	2	数学	対頂角、同位角、錯角について	・忘れ物を防ぐような方策を考えてほしい。今日の授業のように三角定規を持ってきていないと授業に参加できなくなってしまう。担任との連携も大事である。
11	7	K	2	国語	徒然草/平家物語	・1時間の授業で『徒然草』と『平家物語』の古典の教材二つをやるというのはどうか？校内指導教員のU教諭は「よほどのことがない限りやらない」とのこと。前時の対応に課題が残る。
		T	2	数学	多角形の内角と外角について	・前はブラックボックスという教材を使って成功していたが、今回は何もなく生徒はなかなかイメージできなかったようだ。視覚に訴えられるような教材（手製の三角形でも可）程度なら簡単にできたはずである

紀の川市立貴志川中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
11	14	K	3	国語	奥の細道/万葉集	・先週と同様の指摘をした。
		T	1	数学	比例・反比例	・視力検査に使う「ランドルフ環」という教材を使って比例について学習させるという試みは意外なもので見てとても面白かった。1年生の生徒も興味津々で授業に関わっていた。
	21	K	2	国語	漢詩「春望」	・「漢詩」とは文字通り中国の詩であるということが生徒に伝わっているだろうか。ひょっとして授業でやった読みのように読むと思っていないだろうか。そんな心配をしてしまうような授業だった。
		T	2	数学	星形五角形について	・練習問題と課題問題の差が気になる。練習問題で解くためのコツをつかみ、課題問題に生かすことになるのだが、その関連性が希薄だった。
	28	K	2	国語	話し言葉と書き言葉	・教員の説明が長く、生徒が退屈している様子が明らかだった。 ・授業カンファレンスでは改めて「協同学習」の注意点を説明した。
		T	2	数学	比例・反比例	・本来は1年生の単元だが、先日の授業を受けて2年生でも応用できないかという意欲的な授業。 ・ジグソー学習を取り入れた意味が不明だったが、後半になってその意図がわかった。「してやられた！」
12	5	K	2	国語	文法～助詞～	・生徒に与えた課題には7つあったのに、それをやり遂げさせるための時間がたった15分では、十分な考察ができないのは当然。時間の配分が拙かった。
		T	2	数学	定期テストの返却	・返却後、正答率の低かった問題について詳しい解説を行っていたが、それ以外は特に協議することはなかった。

紀の川市立貴志川中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
12	12	K	2	国語	県教委の評価問題の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・県教委が文部科学省の学力・学習状況調査対策のために作成した評価問題を生徒にやらせるよう指示している。今日はそれを各クラスで実施することになっていた。そのため授業カンファレンスは実施しなかった。
		T	2	数学	県教委の評価問題の実施	
1	16	K	2	国語	走れメロス	<ul style="list-style-type: none"> ・二人とも先日実施した課題テストの答案返却及び模範解答の伝達に時間を取られてしまい、その後の授業展開が不十分なものになってしまった。やはり、授業は50分という時間を十分に確保した上でないときちんとしたものにならないという見本のような授業であった。
		T	2	数学	三角形の合同の証明	
	23	K	2	国語	走れメロス	<ul style="list-style-type: none"> ・画一的な授業である。面白みがないから、生徒が興味・関心を持って臨んでいない。指導書に沿って、その指導書に引き摺られているような感じがする。 ・授業の中で「弧」「中心角」といった言葉を遣っているが、その言葉の意味を生徒が解していないような言動が見られた。基本的な語句は生徒の既習事項なのかどうかを確認した上で授業に臨んでもらいたい。
		T	2	数学	円とおうぎ形	
	30	K	2	国語	走れメロス	<ul style="list-style-type: none"> ・「走れメロス」への興味付けとして、最後のヤマ場を寸劇として展開させた。しかし、残念ながら生徒が恥ずかしがって教師が意図した方向に向かわなかったのが残念である。 ・これが何度目かの指摘になるのだが、時間配分がうまくいっていない。そのため「まとめ」が不十分なものになってしまった。
		T	2	数学	平行四辺形の性質	

紀の川市立貴志川中学校

月日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 (2人共通での表記も可)	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
2	6	K	2	国語	文法－終助詞	<ul style="list-style-type: none"> ・文法の学習ではどうしても教師の説明が中心になってしまいがちである。生徒も覚えることに躍起となっている。ここに協同学習を展開する余地があるのではないだろうか。 ・証明をグループ別にして解かそうとしているのだが、平易な問題のためグループでの特色を活かし切れていない。また、グループでの個々の距離が離れすぎているのが気になる。
		T	2	数学	三角形の合同の証明	
2	13	K	2	国語	文法－助動詞	<ul style="list-style-type: none"> ・助動詞そのものを表に、その助動詞の役割を裏に書いたカードをグループ分用意し、カルタ取りを実施した。思っていた以上に盛り上がった。 ・授業の終盤の問題はまさに「ジャンプの課題」で、グループで考えるにはふさわしいものだった。生徒も真剣に取り組んでいたようである。
		T	2	数学	平行線と面積	
2	20	K	2	国語	文法－助動詞	<ul style="list-style-type: none"> ・「メンター制」に係る最後の訪問ということで、二人の初任者に対して、本年度の「成果と課題」、そして来年度に向けての「抱負」を述べてもらった。 ・二人ともこの一年間で様々な悩み、そのゆえに成長できたと思う。これからも頑張ってもらいたい。
		T	2	数学	確率	

初任者に対する訪問指導

和歌山大学客員教授 中家 英

1 はじめに

私が担当している初任者は、2校で4人（A、B、C、D）であり、小学校の講師経験が数年ある人や、大学卒業と同時に採用された人などそれぞれ様々な経歴を持っている。したがって、それぞれの初任者に対しての言葉がけについては微妙に違うことも多い。しかし、人として謙虚な気持ちを持つことや、子どもたちが生き生きとして活動できるように常に向上心を持って取り組むことなどを基本に訪問指導を行った。

訪問指導は、週1回行い、それぞれ1時間の授業を参観して、放課後にカンファレンスを行った。カンファレンスでは、iPadで撮影した映像を見ながら授業をふりかえり、授業づくりや学級経営について等、適宜助言した。それらの内容を、4人の初任者それぞれについて以下のように述べることにする。

2 山崎北小学校 A 教諭について

(1) 変容の概要

A 教諭は、3年間の講師経験もある。1年目は、算数 TT と家庭の専科、2年目は、4年生の担任、3年目の昨年度は、5年生の担任をしていた。新規採用の本年度は、5年生の担任をしている。

A 教諭の学級では、平成28年4月18日（月）に初めて訪問した時から、チャイムとともに授業が始まり、チャイムとともに授業を終え、子どもたちに聞かせる場面では、多くの子どもたちが聞く姿勢を整えているなど、すでに学習規律の整った学級をつくっていた。

拠点校指導教員や校内指導教員を中心とした学年の先生方が共に学ぶという姿勢等の支援もあり、少しずつ深さのある授業展開ができるようになってきた。

(2) 変容の詳細

(ア) 実践課題について

① 5月30日（月）、A 教諭に今後の課題について考えを聞いた。A 教諭は、「授業が練り上がっていくようにしたい。」と言った。そこで、どのようにして練り上げていくかを具体的に考えるように伝えた。

② 6月27日（月）、A 教諭は、「子どもたちが、もっと学びを深めていく授業を行いたい。」と言い、そのためには、「子ども同士が学びあうために、①発問の工夫②子どもの言った意見の扱い方③グループ活動の行い方」を実践課題として、今後の授業で研究していくこととなった。

A 教諭には、こんな授業を行いたいという願いがあつたが、言葉では、「授業が練り上がっていくようにしたい。」ということであった。しかし、「授業が練り上がっていく」ということはどういう状態をいうのか、より具体的に語ることにより、行いたい授業の形が想像できるようになった。さらに、そのために必要なことを考えるようにすると、「発問の工夫」、「子どもの言った意見の扱い方」を今後の自分の課題とした。また、「グループ活動も積極

的に行いたいと語った。

(イ) グループ活動について

① 5月9日(月)、算数の授業(単元「わくわく算数学習」、本時の目標「図や式、表を用いて考え、説明することができる。」)において、授業の途中で4人グループでの活動が入った。この時のグループ活動は、グループ活動の前に個人思考で自分の考えを持ち、その考えを4人グループ内で発表しあう活動であった。その後、全体に戻って考えを発表した。活動自体は、A教諭が普段から聞く姿勢を意識させていることにより、子どもたちの発表を聞く態度がよく、よい学習姿勢が保たれていた。授業は気持ちよく流れたが、それぞれの子どもたちが発表したことを練り上げていく必要がある、そのために、子どもたちの発表した内容や、現在学習している内容が、今後、中学校、高等学校で数学的にどのようにつながっていくのかということを知る必要がある。そのことにより、それぞれの子どもたちを適切にほめることができ、子どもたちのやる気を育てることになり、グループ活動においてもお互いの考えを聞くときに、より深く聞くことのできる子どもを育てることにつながるということを伝えた。

② 6月27日(月)、算数の授業(単元「合同な図形」、本時の目標「三角形の3つの角の和のきまりを適応して、様々な問題を解くことができる。」)において、A教諭は、子どもたちに問題を考えさせているとき、解くことができた子どもたちに、「ミニ先生になって教えてあげて。」と言って、子どもたちが教え始めた。多くの子どもたちが問題のできていない子どもを探してアドバイスをしていた様子は悪くはなかったが、「教えてあげる」というよりも、「教えてもらう」という、「聞く」「聞きあう」方が良く、それがグループ活動につながっていくことを伝えた。また、「教える」「教えてもらう」双方の児童に、それぞれ学習の中で優越感や劣等感を感じさせない配慮が大切であることも付け加えた。

③ 11月28日(月)、算数の授業(単元「面積」、本時の目標「長方形や正方形の面積の求め方をふりかえり、本単元の学習課題をとらえる。直角三角形の面積の求め方を理解する」)において、直角三角形の面積の求め方を、まず一人で考えさせ、次に4人グループ内で自分の考えを説明させた。各グループとも、それぞれの子どもたちはしっかりと説明できていた。また、その説明が分からない場合は、「わからない。」ときちんと言ひ、説明している子どもは何度も説明していた。次に、全体での発表を行ったが、その中でも、一つのグループから、「なんで $4 \div 2$?」と質問が出た。発表した子どもが、再度説明したがまだその子どもはわからず、別の子どもが説明してその子どもを納得させた。子どもたちの意見が交わり合い、理解が深めら



黒板付近で議論する子どもたち

れた素晴らしい状況であった。4人グループ内で「わからない。」と言った子どもに、「あの子どもわからないんだ。自分と同じなんだ。」と別の子どもも感じ、わからないということを全体の中ではっきり言える状況を作っていた。小グループでの話しやすさ、グループ学習のよさを感じた一面であった。

④ 12月12日(月)、算数の授業(単元「面積」、本時の目標「台形の面積の求め方を考え、面積を求める公式を理解する。」)において、個人思考の後、3人の子どもたちが黒板に図を描いたところで、A教諭が、「自分の考えと同じ場合は黒板に自分のネームカードを貼りなさい。」と指示した。黒板の前に大勢の子どもたちが集まっているとき、一人の発表者に数人の子どもが質問し、そこで議論になっていた。真剣に考えている素晴らしい光景であった。これこそグループ活動のもとであり、できれば、その議論を全体の人に広めたかった。

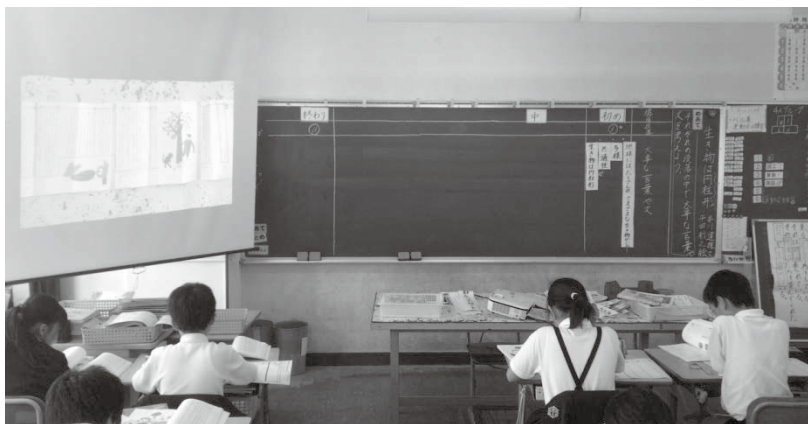
グループ活動の基本は、教え合うことではなく、聞き合うことであることを、その都度伝えてきたが、そのことが少しずつ変容している。

(ウ) 発問に対する予想される児童の発言の扱い方について

① 5月16日(月)、国語の授業(単元「見立てる」、本時の目標「筆者が伝えたかったことをとらえる」)の授業を行った。授業の流れは、A教諭が発問し、子どもが発表し、A教諭が板書し、子どもたちが板書を写すものであった。授業はテンポがよく、スムーズに流れたが、A教諭が発問し、子どもが答える、またA教諭が発問する、子どもが答えるというように、A教諭と子どもが対一になっていることが多かった。また、子どもが発表した内容を、A教諭がすぐに板書して、その後子どもたちが板書を写していたため、子どもたちの思考が途切れているようにも感じたので、あらかじめ自分の発問に対して予想できる子どもたちの反応、子どもたちの発言等をカードに書いておき、子どもたちの発表に即して黒板に貼ることも一つの方法であることを伝えた。また、子どもたちが板書を写す時間を後で用意することもよいと付け加えた。

② 5月23日(月)、国語の授業(単元「生き物は円柱形」本時の目標「文章全体の構成をとらえることができる。筆者が話題としていることや主張していることを読み取ることができる。」)において、

A教諭は、予想される子どもたちの発言を、模造紙を切り取ったたくさんの紙に書いてあり、机の上に用意していた。子どもたちが発言する都度、その紙を黒板に貼っていたので、A教諭があらためて意見を促すことをしなくても、子どもたちの発表が途切れる



子どもたちの発言の模造紙とプロジェクターによる掲示

ことなく行っていた。

(エ) ICT 機器について

① 5月16日(月)、実物投影機で子どもたちのノートを撮影してプロジェクターで映す方法や、iPad やコンピュータであらかじめ入力しておいた画像や映像をプロジェクターで映す方法等を話した。そして、そのような画像や映像が子どもたちの興味を引き、授業に集中させる手立てとなり、子どもたちの理解を助けるものになりやすいことも伝えた。A 教諭は、以前から ICT に興味があり、スムーズに受け入れていた。

② 5月30日(月)、国語の授業(単元「生き物は円柱形」、本時の目標「筆者が一番伝えたかったことは何かを考え、要旨をまとめる。」)において、導入部分で、前時にかかせてあった子どもたちの感想文をプロジェクターで映しながら発表させた。その発表を聞いている子どもたちにとってたいへん聞きやすかった。

③ 6月13日(月)、書写の授業(単元「組み立て方」、本時の目標「『道』の組み立て方を考え、『しよう』のはらい始めの位置に気をつけて書くことができる。」)において、子どもたちの机の上の状況(墨、筆、紙等の準備物の配置)を写真に撮り、プロジェクターで大きく映して、子どもたちに準備物の置き方を指示していた。子どもたちにとって非常にわかりやすく、墨で服等を汚す子どももほとんどいなかった。



④ 6月20日(月)、国語の授業(単元「きいてきいてきいてみよう」、本時の目標「友達のことをよく知るためのよい尋ね方、答え方、記録者のメモの取り方を理解し、インタビューをすることができる。」)において、子どもたちに実際に行わせる、聞き手、話し手、記録者の動きを、あらかじめ5年生の学年の先生方で模擬映像を作っており、プロジェクターで映して見せていた。それを見ている子どもたちの状況等を iPad で撮影しておき、放課後のカンファレンスで確認したところ、一人として手遊び等をしていることもなく、映像を見ている子どもたちの真剣な表情が印象的であった。A 教諭もあらためて映像が引き付ける力を感じたようであった。

国語科学習指導略案	
単元名	きいて、きいて、きいてみよう(本時は3/6)
本時の目標	友達のことをよく知るためのよい尋ね方、答え方、記録者のメモの取り方を理解し、インタビューをすることができる。

児童の学習活動

- 1 本時のめあてを確認する。
「インタビューをするときに気をつけることを考え、インタビューしよう。」
- 2 インタビューをするときに気をつけることを考える。
- 3 あらかじめ先生たちが作成したインタビューの模擬映像を見て、「聞き手」と「話し手」が気をつけることを確認する。
- 4 「記録者」が気をつけることや、記録の仕方について確認する。
- 5 「聞き手」、「話し手」、「記録者」の役割を交代しながら、インタビューをする。
- 6 記録した内容を整理する。
- 7 ふりかえりをする。
- 8 あらかじめ先生たちで作成した映像を見て、次時の内容を知る。

⑤ 11月14日(月)、国語の授業(単元「天気を予想する」、本時の目標「第1段落の問いに対する答えを読み取ることができる。」)において、スクリーンとして白い模造紙を貼っておいて、そこにプロジェクターで教科書の本文を映し出していた。A教諭は、子どもたちに発表の際、そこに、形式段落や意味段落を書き込ませていた。

A教諭は、次々と授業での新しいICTの使い方を見つけ、実践していった。子どもたちの、常に分かりやすく授業をしようとするA教諭を見る眼差しが、月日を追うごとに真剣になっていった。

(オ) 単元計画について

① 9月2日(月)、単元の計画の大切さを伝えた。本時の授業において、子どもたちにどのような力をつけたいのか、そのためには、どのような力をつけておかなければならないかが大切になってくる。そのうえで、最終的に単元の終わりには、子どもたちはどのようなことができるようになっていくのかを知っておく必要がある。

② 9月26日(月)、算数の授業(単元「分数(1)」)、本時の目標「異分母分数のひき算の意味を理解し、計算できる。計算結果を約分する分数のたし算・ひき算について計算できる。」において、単元計画を「分数マスターになろう(1)」と題して、掲示していた。「分数マスターになろう(1)」とは、単元「分数(1)」(全10時間)を各1時間ごと



にワークシートを作成し、グループ全員がワークシートを完成させ、到達できれば先生がそのグループにハンコを押すという。ハンコを10個集めると地図をもらえる。次の単元においても同じことを予定していて、その地図を集めて、次のステージに進むという。この説明を本単元の1時間目に子どもたちに行ったという。子どもたちにこの単元に興味を持たせ、楽しんで学習できるようにしていた。この後、ほとんどの授業では、単元計画を、子どもたちが興味を持ち、楽しく学習できるように工夫して説明し、掲示していた。

3 山崎北小学校 B 教諭について

(1) 変容の概要

大学卒業とともに採用され、講師経験がない。中学校時代に教師になりたい気持ちになり、教育実習時にあらためて教師になりたい気持ちが強くなって、本年度、4年生の担任をしている。

B 教諭は、講師等の経験がないため、授業の進め方や子どもたちとの対応等で多少の戸惑いを見せていたが、本人の熱意と拠点校指導教員の指導や校内指導教員等の支援により2学期頃から授業中の様子にも落ち着きを見せ始め、しっとりとした授業を行うようになった。

(2) 変容の詳細

(ア) 実践課題について

5月30日(月)、B 教諭に今後の課題について考えを聞いた。B 教諭は、「丁寧な言葉で適切な発問を行うこと。」と言った。B 教諭は、発問の際に繰り返しの言葉が多いことを何度か指摘されていたため、「適切な発問」を今後の課題としたと思われた。

そこで、B 教諭に、iPad で授業映像を見ながら、自分の行った発問、自分から見た授業中の子どもたちの様子等、自分が感じていることをふりかえってもらった。B 教諭は、自分の発問を学級全体の子どもたちにきちんと聞かせるために、一人一人を意識する点が欠けていること、学級の中で、発表している児童に偏りがあるため、多くの児童に発表させていないこと、授業中のきまりやルールが決め切れていないため、本当に大切にしなければいけないポイントがあまり明確でないことを挙げた。そして、自分の今後の実践課題を、「子どもの発言から学びを深められるようにするために、子どもたちをよく観察して、子どもたち一人一人に向き合って授業をしていく。」とした。



(イ) 子どもの発言への切り返しと「間」(ま)について

① 5月9日(月)、算数の授業(単元「1けたでわるわり算の筆算」、本時の目標「(2桁) \div (1桁)で、余りが出る場合の筆算の仕方について考え、その筆算ができるようになる。わる数、商、余り、わられる数の関係がわかり、答えの確かめをする。)において、それぞれの児童の発表に、必ず「そうやな。」と返答していた。そのように返答することにより、発表した子どもと先生の一対一のやりとりになってしまい、子どもたち同士の深まりができなくなってしまっている。他の子どもたちに意見を求めたりすることによって、全体での練り上げにつながっていくと伝えた。

② 5月16日(月)、算数の授業(単元「1けたでわるわり算の筆算」、本時の目標「簡単なわり算((2桁) \div (1桁))を暗算で計算することができる。)においても、それぞれの子どもたちの発表に、B教諭がひとりで対応している。子どもと先生の一対一のやりとりになってしまい、子どもたち同士の深まりができていなかった。

そこで、子どもが発表しているとき、その子どもをしっかり見ることと、同時に他の子どもたちの表情もしっかり観察しておく大切さを伝えた。次に、子どもが発表し終わったとき、学級全体に向けて、発表者の言った言葉を、尋ねるような言い方で呟いてみることも試してみてもどうか、自分が呟いた後に少しの「間」(ま)をつくったらどうかと話した。さらに、その時の、人に聞いているような、考えているような表情をつくることも付け加えた。

③ 10月31日(月)、算数の授業(単元「面積」、本時の目標「 m^2 と cm^2 の単位間の相互の関係を理解する。長さの単位が異なる場合の長方形の面積を求める。))において、子どもが発表した内容をB教諭が理解しづらかった場面があった。その時、B教諭は、その子がどのようなことを言ったのかを自分で想像して説明していた。先生自身が分かりづらいことは、他の子どもたちにとっても分かりづらい。そのような場合は、他の子どもたちに聞き返してもよいし、本人に、もう一度説明させてもよい。他の子どもたちなら「〇〇さんは、・・・と言ったのだと思います。」などのように答えるだろう。先生が考えて答えるのではなく、先生が考えなければならないことは、子どもたちに考えさせることであると助言した。また、B教諭の発問に、子どもたちの手の挙がり方が悪かったりすると、同じ発問を繰り返すことが多かった。発問をする場合、「こう聞けばどのように答えるだろうか。」と必ず子どもたちの考えを予想しておく必要がある。そうすると、自分の発問が、最も適切な言い方になるとも助言した。

④ 11月7日(月)、算数の授業(単元「がい数とその計算」、本時の目標「概数に関心をもち、その意味を理解し、概数の表し方を調べていく。))において、いつもよりざわつき感が少なくなっていた。ところどころでノートに書いていない子どもや前を向いていない子どもに適切な注



意をして、学級全体を観察する「間」をとって、静まったところで新たに発問をしたことによる。プリントを配布するときには、「プリントを受け取ったら、すぐに問題を読んでな。」と子どもたちに指示をしていた。そのことにより、子どもたちは黙々と問題文を読んでいた。また、授業中に、一人の子どものつぶやきを拾うことができた。そして、その内容をその子に聞きなおし、学級全体に切り返していた。今までなら、B教諭がすぐに自分で考え、説明していたことが多かったことである。

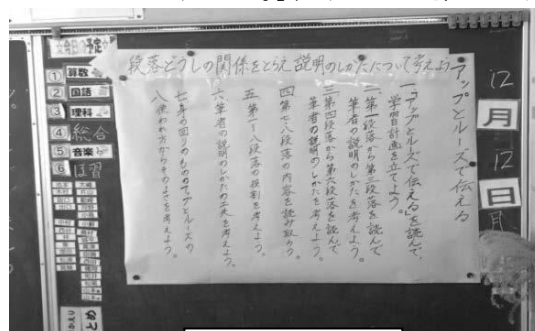
⑤ 11月14日(月)、算数の授業(単元「がい数とその計算」、本時の目標「グラフの目盛りの数を見て概数のとり方を工夫し、概数を使った棒グラフに表すことができる。身のまわりから使われている概数をみつけようとする。」)の導入部分で、B教諭と子どもたちとの間で次のようなやり取りがあった。B教諭が、各都道府県のりんごの収穫量から棒グラフを作ることを投げかけたところ、子どもたちは、口々に「無理。」等のことを言い出した。それをとらえてB教諭が、「なんで無理?」と聞き返すと、一人の子どもが、「やりにくい。」と答え、B教諭が、「なぜやりにくい?」と返した。他の子が、「棒グラフだから。」と言うと、B教諭が、「棒グラフだから?」と聞き返し、別の子どもが、「細かい。」と答えた。さらにB教諭が、「何が?」と聞き返すと、また別の子が、「メモリが。」と答えた。学級全体の中で、数を四捨五入して概数にし、棒グラフの1目盛りをいくつにするかを考えさせていった。今まで見られなかった子どもたちとのやり取りにB教諭の成長を感じた。この間、次々と手の挙がる子どもが増えていった。

(ウ) 単元計画について

本時の授業において、子どもたちにどのような力をつけたいのか、そのためには、どのような力をつけておかなければならないのかが大切になってくる。そのうえで、最終的に単元の終わりには、子どもたちはどのようなことができるようになっていくのかということを確認するために、単元をどのように計画するのかは大切なことであることを伝えてきた。

12月12日(月)、国語の授業(単元「アップとルーズで伝える。」、本時の目標「文章全体の構成をつかむことができる。」)を参観したときに、教室前方の掲示板に、単元計画を掲示してあった。本時は、全8時間中5時間目にあたったが、1時間目に子どもたちに説明したという。

B教諭は、A教諭の授業を毎週参観していて、A教諭が単元計画を、その単元の1時間目に常に子どもたちに説明していたのを参考にしたと思える。



単元計画の掲示

4 岩出小学校C教諭について

(1) 変容の概要

小学校で2年間の講師経験がある。1年目は、家庭の専科と算数TT、2年目は、外国語活動と家庭の専科をしていた。本年度は、3年生の担任をしている。

C教諭は、4月当初から3年生の子どもたちに合わせた話し方が上手であり、柔らかい雰

囲気で学級経営を行っていた。

本人の持っている熱心さと拠点校指導教員や校内指導教員、多くの先生の影響により、子どもたちの観察力が向上し、また、教材提示の仕方や子どもたちに話すときの「間」のとり方がうまくなった。

(2) 変容の詳細

(ア) 今年度の実践課題

子どもの発言で授業を進められるようにする。

そのために、

ア 発問の工夫

イ 切り返し方

ウ 誤答を大事にする

エ 授業が分かる板書づくり

授業づくりのために大切なことを3つ話した。1つ目は、授業は難しいことをわかりやすくすること。2つ目は、授業をわかりやすくするために、より具体的にすること。3つ目は、具体的にすることの中で楽しくすること。授業は、「なぜなんだろう。」「えっ!」という驚きがあり、「そうそう」という共感があり、「なるほど。」という理解があるものが良いということも付け加えた。

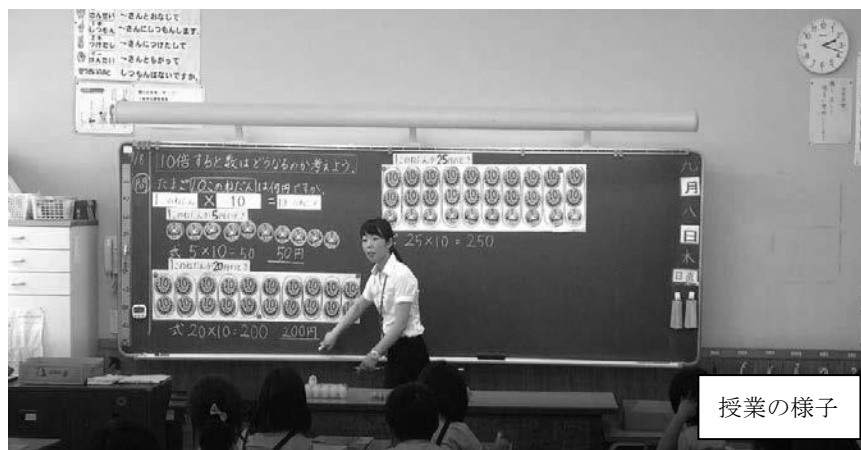
(イ) 子どもたちと向き合っている時間について

① 6月17日(金)、算数の授業(単元「円と球」、本時の目標「身のまわりにあるまるい形をもとに、球について知り、性質を理解する。」)において、C教諭が45分の授業時間の中で、どれくらいの時間を子どもたちと向き合っているか(子どもたちの方をしっかりと見ているか、子どもたちの表情等を観察しているか)をストップウォッチを使って計った。そうすると、C教諭が授業中に子どもたちと向き合っていた時間は、17分30秒であった。教科書等を見ていた時間や板書をしていた時間、教材を準備していた時間、次の発問や切り返しの発問等を考えていたため、うつろな目であった時間、何気なく下の方や横の方を見ていた時間等が子どもたちと向き合っていなかった時間であった。どのようにすればできる限り子どもたちの方を向いていられるか考えるように話した。

② 9月8日(木)、算数の授業(単元「一億までの数」、本時の目標「数を10倍することについて理解する。」)において、6月17日のときと同じようにストップウォッチでC教諭が子どもたちと向き合っている時間を計ってみると、約30分であった。C教諭は、授業中の子どもたちの発言をあらかじめ予想して模造紙にマジックで書いており、子どもたちの発表があると、その紙を貼るだけにして向き合う時間を確保していた。また、教科書や教材・教具等をほとんど見ず、むやみに下の方や横の方を見ずに授業を進めていた。

(ウ) 教材の提示の仕方について

① 5月27日(金)、授業づくりのために大切なことを3つ話した。1つ目は、授業は難しいことをわかりやすくすること。2つ目は、授業をわかりやすくするために、より具体的にすること。3つ目は、具体的にすることを楽しむこと。授業は、「なぜなんだろう。」「えっ!」という驚きがあり、「そうそう」という共感があり、「なるほど。」という理解があるものが良いということも付け加えた。



授業の様子



授業の様子

② 6月17日(金)、算数の授業(単元「円と球」、本時の目標「身のまわりにあるまるい形をもとに、球について知り、性質を理解する。」)において、球の切り口がどんな形になるのかという問題を考えさせた後、C教諭は、粘土で作った球(粘土が良いか悪いかは別として)を実際に切って見せた。この時の見せ方が大変良かった。粘土で作った球を、手を挙げて高いところから机の上に置き、ゆっくりとナイフで2つに切っていった。切られた状態の半球を球の状態のまま自分の口のあたりにゆっくり持ち上げて、そこから十分「間」をとって、次にパッと開いて切り口を見せた。子どもたちの中には、思わず手をたたいて喜んだ子どももいた。これは、教材の提示する場合の「間」のとり方で、「そうそう」と共感を与えた場面であった。

③ 9月8日(木)、算数の授業(単元「一億までの数」、本時の目標「数を10倍することについて理解する。」)においても同じようなことがあった。教材の提示の仕方をわざとゆっくりして、次にパッとだすなど子どもたちが注目できるようにしていた。その時のC教諭の表情や言葉の抑揚も適切であった。

(エ) 子どもの発言への切り返しについて

C教諭の子どもたちへの話し方は丁寧であり、また話す速度も適切であった。しかし、子

どもが発表した後、そのことを繋げてみんなで考えることが必要であった。子どもの発言に対しての切り返しを考えるように促した。中学年の場合、一人の子どもの発表後、「もう一度自分の言葉で言ってごらん。」と別の子どもたちに繰り返させることも効果的であり、そうすることによって、しっかり聞くことを習慣づけられ、発表の苦手な子どもには、コミュニケーション能力の素地を作ることができることを伝えた。さらに、発表した子どもの言葉を使って学級全体に聞き返すこともよいと付け加えた。

① 10月28日(金)、子どもの発言した内容をとらえて切り返し、子ども同士がつなげていく授業の展開の仕方が上手になっていた。4月に考えていた自分の課題を解決しているように感じる。

算数の授業(単元「あまりのあるわり算」、本時の目標「余りのあるわり算の答えの確かめをすることができる。」)における展開の一部

T 今から問題を貼りますので、写さなくていいです。みんなで読んでください。

C 「あめ23こを1ふくろに5こずつ入れると何ふくろできて、何こあまりますか。」

T 式でも、言葉でも、図でもいいです。考えてください。

C ブロックでやろう。

～個人思考～

T 一度鉛筆を置きましょう。考えられましたか。

C $23 \div 5$

C $23 \div 5 = 4$ あまり3

T $23 \div 5 = 3$ あまり8 これではだめ?

C $23 \div 5 = 4$ あまり3が正しいです。あまりが8だったら、 $\div 5$ をこえるので、まだわれます。

C 3あまり8 の8は、 $23 \div 5$ の5よりも大きいので、もう一つとれます。

C 3あまり8 はだめです。 $5 \times 3 = 15$ で、あまりは、5の段で、1、2、3、4です。

T 図で説明してください。

C (黒板で図を描いて説明する。)

T 先生が間違っただけはどうしてだろう。

C (黒板で図を描いて説明する。)

C 8こもあるから、8から5引いて、1ふくろに入るからです。

T ブロックを使わないで確かめる方法はありませんか。

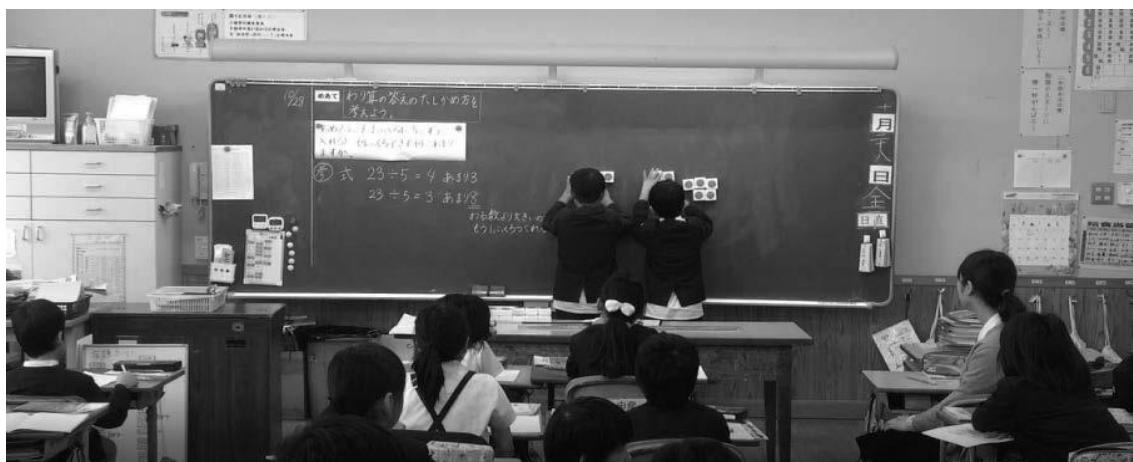
C 九九で考えます。五二10、五三15 とです。

C 五三15に5たして、20になります。五四20、まだいけます。

T まだいけるって?

C 5と8だと5のほうが小さいです。一番あまりが少ない数にするので、4あまり3です。

- T あまりが少ない、小さいって、どうしたらわかるの？
- C たし算を使います。5×4に3をたします。
- C あまりは小さいほうがいいです。5×3=20 が 5×3=15より23に近いです。



子どもが発表のため操作している様子

5 岩出小学校D教諭について

(1) 変容の概要

民間で5年間勤務し、その中では、幼稚園の体育教師をしていた。その後、小学校の講師として、家庭専科、算数TTを行っていた。本年度は、2年生の担任をしている。

D教諭は、中学校、高等学校の保健体育の免許を取得していることもあって、4月当初から、子どもたちへは指示が適切に行われていた。

本人の持っている明るさと教職に対する意欲、また、拠点校指導教員からの指導や校内指導教員や多くの先生からの支援等により、子どもたちの聞く姿勢や話し方等たいへん向上した。

(2) 変容の詳細

(ア) 今年度の実践課題

子どもたちが活発に話す活動を支援する。

そのために、

子どもの聞く姿勢を育てる

子どもの話し方を育てる

つぶやきに共感する

子どもの意見に子どもたちが反応するように、自分がすぐに反応しない。

授業づくりのために大切なことを3つ話した。1つ目は、授業は難しいことをわかりやすくすること。2つ目は、授業をわかりやすくするために、より具体的にすること。3つ目は、具体的にすることの中で楽しくすること。授業は、「なぜなんだろう。」「えっ!」という驚きがあ

り、「そうそう」という共感があり、「なるほど。」という理解があるものが良いということも付け加えた。

(イ) 子どもたちと向き合っている時間について

① 6月10日(金)、算数の授業(単元「たし算とひき算のひっ算」、本時の目標「筆算の学習をする」という課題をつかむ。繰り上がりのない筆算ができる。)において、D教諭が45分の授業時間の中で、どれくらいの時間を子どもたちと向き合っているか(子どもたちの方をしっかりと見ているか、子どもたちの表情等を観察しているか)をストップウォッチを使って計った。そうすると、D教諭が授業中に子どもたちと向き合っていた時間は、7分30秒であった。教科書等を見ていた時間や板書をしていた時間、教材を準備していた時間、次の発問や切り返しの発問等を考えていたため、うつろな目であった時間等が子どもたちと向き合っていなかった時間であった。どのようにすればできる限り子どもたちの方を向いていられるか考えるように話した。

② 9月8日(木)、算数の授業(単元「かさ」、本時の目標「かさはかるにはますを使うことや、単位Lを用いることを理解する。’)において、6月10日のときと同じようにストップウォッチでD教諭が子どもたちと向き合っている時間を計ってみると、約30分であった。D教諭は、授業中の子どもたちの発言をあらかじめ予想して模造紙にマジックで書いており、子どもたちの発表があると、その紙を貼るだけにして向き合う時間を確保していた。また、教科書や教材・教具等をほとんど見ずに授業を進めていた。



子どもたちと向き合っている様子

確保していた。また、教科書や教材・教具等をほとんど見ずに授業を進めていた。

(ウ) 子どもの聞く姿勢や話し方を育てることについて

① D教諭は、4月当初、発表している子どもの話を聞かせるために、自分の立ち位置を発表者から遠くなるように移動したり、しゃがんで子どもの目線に合わせていたりして工夫していた。そこで、子どもたちの聞く姿勢を育てるために、姿勢の良い子どもをさりげなくほめることや、発表者の発言に合わせて自分の表情を豊かにすること、聞くことができていない子どもの近くにいくことなどを話した。子ども同士のつながりができるような授業をするためには、一人の子どもが発表しているとき、他の子どもたちがしっかりと聞いていれば、次に自分が言いたくて、さらに聞く姿勢が良くなっていくことも多い。低学年の場合、一人の子どもの発表後、「もう一度自分の言葉で言ってごらん。」と別の子どもたちに繰り返させ

ることも効果的であり、さらに聞く姿勢を向上させられる可能性があることを付け加えた。

② 10月21日(金)、算数の授業(単元「計算のじゅんじょ」、本時の目標「数量の相当関係や大小関係を、等号や不等号を使って式に表すことができる。」)において、一人の子どもが発表していたとき、それを聞いていなかったと思われる2人の子どもたちを順に指名し、同じ内容のことを答えさせようとした。その子どもたちは、何も言えなかったが、D教諭は、「聞いていなかった。」と反省しているだろう子どもたちの表情をつかんで、あえて注意をしなかった。元来優しさと包容力のあるD教諭であるが、授業中におけるD教諭の観察力がさらに向上したと感じた。

今まで、D教諭は、子どもたちの挙手の状況をさらに良くしようとして、その子どもの挙手の回数を表示したりしていたが、あまり効果が上がらなかったように感じた。

③ 11月4日(金)、国語の授業(単元「しかけカードの作り方」、本時の目標「しかけカードの作り方を読み、作り方の手順を確かめながらしかけカードを作ることができる。」)において、以前に比較して多くの子どもたちが手を挙げて発表しようとしていた。その中には、4月以降ほとんど手を挙げていなかった子どももいた。D教諭に、どのような取組をしてきたのかを尋ねると、D教諭は、「特に変わったことをしたわけでなく、手を挙げている子どもをほめてきたからでしょう

か。」と話していた。また、この授業は、昼休憩が終わってからの5限であったので、D教諭は、授業を始める前に、「姿勢のいい人、1人、2人、3人、〇〇くん花丸です。」と言って、ほめて整然とさせていた。全員が静まるまでの「間」のとり方が良かった。



机間指導の様子

④ 11月11日(金)、一人の子どもが発表しているとき、その子どもの次に自分が発表したくて、他の子どもたちがしっかり聞いていた。また、授業中における子どもたち同士の意見のつながりができつつあった

11月11日(金)、算数の授業(単元「かけ算(2)」、本時の目標「図を使って6の段の九九を構成し、その唱え方を知る。」)における展開の一部

- T 6×3 は?
C 18です。
T 6×4 は?
C 24です。
T 何か気づきましたか。
C 6つつふえています。
C どこがですか。

- C かけられる数、かける数ですか。
 C かけられる数。
 T かけられる数ってどっち？
 C こっち。
 C ふえてへんよ。
 C 答えが6こずつふえている。
 T 答えが6こずつふえていますね。

⑤ 11月18日（金）、D 教諭がめあてを板書していると、子どもたちは、指示をされていないのにめあてを読みながら書いていた。普段からめあてを全員で読んでいることがうかがわれる。また、一人の子どもの発表に対して、ほとんどの子どもたちがたいへんよく聞いている。そのため、質問が出たりして意見がつながりやすかった。子どもたちに個人思考をさせているときに、少しおしゃべりの声が聞こえてきた。D 教諭は、すかさず「今は一人で考える時間です。おしゃべりはいいです。」と言った。その後、また元のような静寂ができていた。また、一人の子どもの発表中、時々良い姿勢で聞いている子どもをさりげなくほめていた。そのことにより、さらに多くの子どもたちの聞く姿勢が良くなった。



算数

挙手の様子

11月18日（金）、算数の授業（単元「かけ算（2）」、本時の目標「アレイ図を使って8の段、9の段の九九を自分の力でつくる。」）における展開の一部

- T これを見て何の段かわかりますか。
 C 8の段です。
 T どうして8の段ってわかるの？
 C 8に1をかけています。
 C 8に2をかけています。
 C 8に3をかけています。
 T 今日のめあては、「8の段と9の段の九九を考えよう。」です。
 （D 教諭が板書していると、同時に子どもたちが一斉にめあてを読み始めた。）
 T 8の段は、8かける？
 C 1です。
 T 次は、8かける？
 C 2です。
 T 8×1 、 8×2 、 8×3 と続いていきます。

- T 8の段の答えはどのようにしたらわかりますか。
- C 答えに8をつけます。
- C 答えと8を合わせます。
- C 8×2 は、 8×1 の答えに8をたします。
- C アレイ図を使うとわかりやすいです。
- T それでは、アレイ図を使っていきましょう。

6 おわりに

4月中旬から4人の初任者に関わり、それぞれの授業を参観し、放課後カンファレンスを行ってきた。4人の初任者は、性格、経歴等様々な違いはあったが、共通して備えているものは、教職に対する強い熱意であった。私の稚拙な指摘や表現に対しても、常にペンを持ち前向きに捉えて、次の週には変化が表れていることも少なくなかった。

また、授業後に毎回、カンファレンスを行うにあたって拠点校指導教員と打ち合わせを行っていた。常に、子どもたちに向き合える学び続ける教師ということを基本に、子どもたちの学びの様子、発問のあり方等、話し合いを行った。この話し合いは、私自身学び直しをさせていただいたようなものであり、拠点校指導教員には感謝している。

最後に、2校の校長、教頭のメンター制度の理解と多くの教職員のいろいろな配慮に深く感謝している。

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他		
	個人名	学年	教科等	単元名など				
4月	22	C	3	国語	「きつつきの商売」	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動を行う際の注意点について 授業中の話し方や話す速度について 支援の必要な児童への具体的な指導方法について 		
		D	2	国語	「ふきのとう」			
	27	C	3	学活	「代表委員会に向けて学級会をしよう」	<ul style="list-style-type: none"> 学級会における先生の指示の仕方等について 教具の使い方について 教科横断的な道徳の考え方について 		
		D	2	算数	「たし算とひき算」			
5月	6	C	3	算数	「わり算」	<ul style="list-style-type: none"> 教室掲示について 児童の発表のさせ方について 学級経営全般において児童に親切的な対応をすることについて 		
		D	2	国語	「春がいっぱい」			
	13	C	3	国語	「春の楽しみ」	<ul style="list-style-type: none"> 児童同士の意見交流について グループ活動の役割分担について 児童のほめ方について 		
		D	2	国語	「たんぼぼのちえ」			
	20	D	2	国語	「たんぼぼのちえ」	<ul style="list-style-type: none"> 授業の導入部分の工夫について 聴く姿勢をよくするためのほめ方について 支援の必要な児童の指導について 		
	27	C	3	算数	「わり算」	<ul style="list-style-type: none"> 児童理解を深め、支援の必要な児童への支援について ワークシートや、準備物の必要性について 児童の興味を引く授業の導入の工夫について 授業づくりについて 		1年生を迎える会の参観
		D	2	国語	「たんぼぼのちえ」			

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
6月	10	C	3	算数	「円と球」	<ul style="list-style-type: none"> 授業中における児童の活動のさせ方について 発問を具体的にすることについて 目的意識をもって机間巡視することについて 子どもたちと向き合っている時間について 	
		D	2	算数	「たし算とひき算のひっ算のひっ算」		
	17	C	3	算数	「円と球」	<ul style="list-style-type: none"> 授業中に児童をしっかり観察することについて 発問によって児童の反応が変わることについて 学級の課題解決について 教材提示の仕方について 	
		D	2	算数	「たし算とひき算のひっ算」		
	24	C	3	算数	「たし算とひき算の筆算」	<ul style="list-style-type: none"> 授業の導入部分の工夫について 児童のつぶやきのとらえ方について 今後の実践課題について7月 	
		D	2	国語	「スイミー」		
7月	1	C	3	国語	「もうすぐ雨に」	<ul style="list-style-type: none"> 道徳における指導の注意点について 主発問と補助発問について 	
		D	2	道徳	「おじいさんのうしろすがた」		
8月	5					校内研修にて講演（題「授業づくりのために」）を行う	

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
9月	8	C	3	算数	「一億までの数」	<ul style="list-style-type: none"> ・児童と向き合っている時間について ・授業時間オーバーを解消するために、授業のどこがより大切かを見極めることについて
		D	2	算数	「かさ」	
	16	C	3	算数	「買えますか？買えませんか？」	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の様々な意見の扱い方により本時の目標を確実に達成する方法について ・児童がより考えやすくするために、教具を児童自身に操作させることについて ・板書の写させ方について
		D	2	算数	「たし算とひき算のひっ算」	
	23	C	3	国語	「へんとつくり」	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動について ・授業の時間配分について ・本時の目標を達成するための工夫について
		D	2	国語	「どうぶつ園のじゅうい」	
	30	C	3	算数	「時間と長さ」	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発表に対する切り返しについて ・授業の導入部分の工夫について ・一斉に一人残らず指導するタイミングについて
		D	2	算数	「たし算とひき算のひっ算」	
10月	7	C	3	算数	「時間と長さ」	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の初発問の行い方と手の上がない児童の指導について ・発問をより分かりやすくするための工夫について ・児童の発表時の切り返しの言葉について
		D	2	国語	「お手紙」	

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
10月	14	C	3	国語	「ちいちゃんのかけおくり」	<ul style="list-style-type: none"> ・主発問と補助発問の行い方について ・グループ活動において気をつけることについて ・児童の発表の切り返しについて
		D	2	国語	「お手紙」	
	21	C	3	算数	「あまりのあるわり算」	<ul style="list-style-type: none"> ・導入の工夫について ・授業中の子どもたちの観察と子どもたちの特性について ・子どもが手を挙げない理由について
		D	2	算数	「計算のじゅんじょ」	
	28	C	3	算数	「あまりのあるわり算」	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の目標に迫る手立てについて ・子どもたちに挙手をさせる方法について ・子どもの発表に対しての切り返し方について
		D	2	算数	「かけ算（1）」	
11月	4	C	3	書写	「名前を書こう（小筆）」	<ul style="list-style-type: none"> ・注意をするときの間のとり方について ・予想されるトラブル等を防ぐための工夫について ・児童の学年に応じた言葉の使い方について
		D	2	国語	「しかけカードの作り方」	
	11	C	3	算数	「二等辺三角形と正三角形」	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの思考力を想像することについて ・よりわかりやすくするための板書について
		D	2	算数	「かけ算（2）」	
	18	C	3	図工	「でこぼこもようのなかまたち」	<ul style="list-style-type: none"> ・学習規律を指導する場面について ・グループ活動のよさについて ・単元計画の説明について
		D	2	算数	「かけ算（2）」	

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
11月	25	C	3	国語	「三年とうげ」	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちに単元計画を知らせる意味について ペア学習のあり方について 子どもたちが楽しんで学習できるための工夫について
		D	2	国語	「あったらいいなこんなもの」	
12月	9	C	3	算数	「1けたをかけるかけ算の筆算」	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを説明するいろいろな方法について 適切な教具の準備について
		D	2	算数	「三角形と四角形」	
	16	C	3	算数	「重さ」	<ul style="list-style-type: none"> 個人思考の時間の設定と机間指導、できていない子どもに対して用意しておく準備物等について 人権意識を育てる子どもの発言の正し方について
		D	2	算数	「九九のきまり」	
1月	13	C	3	算数	「分数」	<ul style="list-style-type: none"> 発問の工夫と優れた発問の条件等について
		D	2	算数	「九九のきまり」	
	20	C	3	算数	「べつべつに、いっしょに」	<ul style="list-style-type: none"> 2年生の体育の授業と3年生の算数の授業のそれぞれについての考察
		D	2	体育	「体づくり運動」	
	27	C	3	算数	「計算のきまり」	<ul style="list-style-type: none"> 発問の工夫について まとめの方法について
		D	2	算数	「100 cmをこえる長さ」	

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他
	個人名	学年	教科等	単元名など		
2月	3	C	3	国語	「しりょうから分かる、小学生のこと」	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動のあり方等について
		D	2	国語	「おにごっこ」	
	10	C	3	算数	「小数」	<ul style="list-style-type: none"> 本時の目標を達成するためのワークシートのあり方について
		D	2	国語	「おにごっこ」	
	17	C	3	算数	「小数」	<ul style="list-style-type: none"> 1年間のふりかえりについて
		D	2	国語	「みんなできめよう」	

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
4月	18	A	5	算数	「体積」	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の聴く態度の育て方について ・授業中の言葉使いや机間巡視について ・授業者の表情や児童の観察について 	
		B	4	算数	「角の大きさ」		
	25	A	5	算数	「体積」	<ul style="list-style-type: none"> ・先生と児童とが1対1にならず、学級全体に向けてのことについて ・机間巡視の目的について ・授業のテンポについて 	
		B	4	算数	「角の大きさ」		
5月	9	A	5	算数	「わくわく算数学習」	<ul style="list-style-type: none"> ・発問内容と児童のつぶやきのとらえ方について ・予想される児童の活動とそれに必要な教具について ・現在学習している内容が今後どのように発展していくかということについて 	講師の授業参観
		B	4	算数	「1けたでわるわり算の筆算」		
	16	A	5	国語	「見立てる」	<ul style="list-style-type: none"> ・先週の授業から今週の授業に向けて取り組んできたことについて ・ICT機器の活用について ・発問と板書について 	講師の授業参観
		B	4	算数	「1けたでわるわり算の筆算」		
	23	A	5	国語	「生き物は円柱形」	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの児童に発表させる工夫について ・児童が楽しんで学習する工夫について ・主発問と補助発問について 	講師の授業参観
		B	4	算数	「折れ線グラフ」		
	30	A	5	国語	「生き物は円柱形」	<ul style="list-style-type: none"> ・発問時の先生の言葉使いや内容について ・授業の導入部分の工夫について ・説明文のキーワードから要旨をまとめる方法について 	講師の授業参観
		B	4	算数	「一億をこえる数」		

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
6月	13	A	5	書写	「組み立て方」	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中の言葉使いについて ・個人思考をさせる時の注意点等について ・プロジェクター等のICT機器の良さについて 	講師の授業参観
		B	4	算数	「一億をこえる数」		
	20	A	5	国語	「きいてきいてきいてみよう」	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中における児童の観察について ・グループ活動における机間巡視について ・学年ブロックでの授業研究について 	講師の授業参観
		B	4	道徳	「じいちゃんが教えてくれたこと」		
	27	A	5	算数	「合同な図形」	<ul style="list-style-type: none"> ・1対多であっても、1対1と同じように向き合って話をする工夫について ・児童同士が学びあうことへの注意点について ・今後の実践課題について 	講師の授業参観 教育実習生の授業参観
		B	4	算数	「垂直・平行と四角形」		
7月	4	A	5	国語	「もうすぐ雨に」	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の様子をよく観察するために、どのようにして児童を向き合った授業を展開するかということについて ・本時の授業を行うための準備について 	講師の授業参観
		B	4	算数	「垂直・平行と四角形」		
	11	A	5	算数	「式と計算」	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の柱について ・グループ活動での児童の学びの深め方について ・ワークシートの作り方について 	講師の授業参観
		B	4	算数	「小数」		
	27						校内研修にて講演

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
9月	2	A	5	算数	「整数（公約数）」	・子どもたち同士で学び合わせるために、どこをどのように考えさせるかということについて ・自分の行ったきた学級経営のふりかえりについて ・単元計画について	講師の授業参観
		B	4	国語	「ごんぎつね」		
	26	A	5	算数	「分数（1）」	・発問における言葉の精選について ・グループ活動での児童の学びの深め方について ・子どもの発言を予想することとその切り返しについて	
		B	4	算数	「式と計算の順じょ」		
10月	3	A	5	算数	「へんとつくり」	・授業の初発問について ・導入・展開・まとめの時間配分について時間配分 ・グループ学習について	講師の授業参観
		B	4	算数	「2けたでわるわり算の筆算」		
	17	A	5	算数	「平均とその利用」	・発問における言葉の精選と子ども目線の教材研究について ・グループ活動での個人思考の在り方とルールについて	講師の授業参観
		B	4	算数	「2けたでわるわり算の筆算」		
	24	A	5	国語	「大造じいさんとガン」	・ワークシートの良さと配るタイミングについて ・本時の中心の活動を充実させるための時間配分について ・グループ活動での声の大きさ等について	講師の授業参観
		B	4	算数	「面積」		
	31	A	5	算数	「単位量あたりの大きさ」	・発問時の子どもたちへの聞かせ方について ・子どもの発表に対しての切り返し方について ・グループ活動での学びについて	講師の授業参観
		B	4	算数	「面積」		

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
11月	7	A	5	算数	「分数（2）」	・発問とそれによる予想される子どもたちの考えや発言について ・授業中に必要な指示について ・グループ学習について	講師の授業参観
		B	4	算数	「がい数とその計算」		
	14	A	5	国語	「天気を予想する」	・ICTの効果的な利用について ・より優れた感性を身につけることについて ・切り返しの発問について	講師の授業参観
		B	4	算数	「がい数とその計算」		
	21	A	5	国語	「天気を予想する」	・教材研究の工夫と教材解釈の深さの追及について ・本時の目標を達成するために必要なことについて	講師の授業参観
		B	4	算数	「もとの数はいくつ」		
	4	A	5	算数	「面積」	・子どもたちに単元計画を知らせることの意味について ・グループ活動で、説明の仕方を学習させるのか、グループ内で一緒に聞き合い教え合うことを目指すのかということについて	講師の授業参観
		B	4	算数	「どんな計算になるのかな」		
12月	12	A	5	算数	「面積」	・机間巡視時のヒントカード等について ・グループ活動のよさについて ・個人思考の時間設定について	講師の授業参観
		B	4	国語	「アップとルーズで伝える」		
1月	16	A	5	算数	「割合」	・発問の工夫と優れた発問の条件等について	講師の授業参観
		B	4	算数	「分数」		

月 日	主な授業参観等の概要				カンファレンス等における指導観 2人共通での表記も可	その他	
	個人名	学年	教科等	単元名など			
1月	23	A	5	算数	「割合」	・発問の工夫について ・ワークシート等の準備物について	講師の授業参観
		B	4	算数	「分数」		
	30	A	5	算数	「割合」	・発問の工夫と作り方について	講師の授業参観
		B	4	算数	「分数」		
2月	6	A	5	算数	「円と正多角形」	・適切な教具等について ・子どもが間違った答えを言った時の対応について	講師の授業参観
		B	4	算数	「変わり方」		
	13	A	5	算数	「円と正多角形」	・プロジェクト報告会について	講師の授業参観
		B	4	国語	「聞き取りメモの工夫」		
	20	A	5	算数	「変わり方」	・1年間のふりかえりについて	講師の授業参観
		B	4	算数	「直方体と立方体」		

特別支援学校において実施した初任者に対する訪問指導の記録等

和歌山大学客員教授 三反田 和人

1 はじめに

当職が担当する訪問校は後述する2校の県立特別支援学校で、対象初任者は計10名となる。

訪問日に初任者すべての授業を参観することはかなわず、当該校と相談し、午前と午後にそれぞれ参観する授業者を各1名指定してもらい、授業記録等を記載した上で後日のカンファレンスで活用する方法をとってきた。

授業そのものをVTRで録画し、放課後に行うカンファレンス（以下、カンファと記載する。）では、各学校ごとに初任者全員と視聴することで授業に対する協議を行うことが有効であり、当初はその形式でカンファの実施を検討したが、授業の対象が障害のある児童生徒であり、録画に関して保護者の様々な考え方や子ども本人からの拒否、授業に集中して参加させるといった配慮から、実際に撮影した回数はそれほど多くはない。

また、使用する機器に関しても外部から持ち込むのではなく、校長の許可を得た上で「校内研修記録用」として学校備品を使用し、カンファで使用するという限定を行った上で録画した経緯があり、本報告書にも画像等の掲載がない点をあらかじめ記載しておく。

一方、校内カンファの内容として、授業に対する内容を実施するとともに校内研修の一端として様々な内容の資料を作成し、それを用いて初任者の段階から理解しておくべき様々な内容を説明や解説を交えて行ってきた。

授業評価以外に行った校内研修でのカンファ内容や資料の概要は別稿で説明を行うこととする。

本稿では、まず、各初任者に対して行ってきた授業に対する指導や助言の内容を記載するが、毎回の授業記録等を作成・整理したものを配布し、直接、授業を参観していない初任者に対して、授業内容がイメージできる内容となるよう工夫を行うと同時に、それぞれの授業で用いた教案等を使って授業評価や課題提示を行った。

各初任者の成長に関して行った評価については、年度当初に当職が各初任者に共通に提示した項目、「授業への心構え」や「教材準備」、「指導案の作成」や「児童生徒に対する実際の指導」等で行った。

一方、各初任者には上記4項目を28に細分した小項目において自己評価を行ってもらった。その中で成長を感じている部分と課題と考えている内容をまとめて記す。

2 紀北支援学校について

当該校は、分校を含めると76学級、在籍児童生徒数が270名を超え、教員数も160名近い規模となり、本県では最も大きな特別支援学校である。

本校は、本県で最も古くに設置された知的障害特別支援学校として開校以来30年以上の歴史があり、有形無形に指導実践の伝統や本県の特別支援学校を牽引してきた自負、また、研修の充実等の学校風土があり、文字どおりフラッグシップたる役割を果たしてきた。